

第4章 湯浅克衛文学の植民地空間

第1節 湯浅克衛文学と母胎としての水原

1 はじめに

湯浅克衛は、一九三五年四月、『文学評論』と『改造』に、それぞれ「カンナニ」と「炎の記録」をもって作家としての出発をなしている。氏の代表作ともいふべきこの二作が、同年同月に発表されたことは、湯浅文学が出發当初から抱えることになる二つの方向性を示すものといふこともできる。それは、朝鮮への興味と移民への問題であるが、初期の時点では、まだ二つの問題が結合したかたちのまま、朝鮮に定着する日本人の移民に関わる問題として取り上げられているように思われる。そして、湯浅文学の出發をなすこの二つの作品は、いずれも朝鮮の水原を舞台にしている。もちろん、この二作以外にも、氏の作品には水原を舞台にしているものが数多くあることから、湯浅文学では水原が非常に重要なモチーフになっているといえる。水原は湯浅克衛が幼年期以来を過ごした町である。一人の作家が自分の育った町を描くのは、なんの不思議なことではない。しかし、湯浅の場合は、執拗に水原を描いており、彼が描く朝鮮を舞台にしている作品の多くが水原を舞台にするか、あるいは水原となんらかの関わりをもっている。とすれば、水原というのは、湯浅文学において、ただの朝鮮の一定の場所としてはすまされない、ある特別な意味をもつ場所としては考えられないだろうか。以下、湯浅の作品中、水原を舞台にしている作品を取り上げて、湯浅文学における水原のもつ意味を考察してみることにする。その前にまず、水原の街の歴史と湯浅文学によく登場してくる水原のいくつかの場所について紹介する。

2 水原

湯浅克衛の長編小説「城門の街」の冒頭には、『発展せる水原』という本が紹介され、その緒言の部分が大きく引用されている。著者は酒井政之助（作品では赤井政之助）、一九一四年九月に出版されたもので、水原の街について総合的に書かれたほとんど最初の本である(一)。「発展する水原」は同氏によってその内容の一部が補われ、後の一九二三年十月、『水原』という題で再出版されている。しかし、この『水原』の付録には、「水原と人」という欄があり、水原で活躍したおもに日本人名士の名前が並んでいるなか、湯浅克衛の父親湯浅伊平の名前も確認できる(二)。ということから、この二冊は当時の水原の様子をみる恰好の本で

あり、また『発展せる水原』は湯浅文学とも密接な関わりがあることから、この二冊を参考にして水原の街を簡単に紹介しよう。

水原は、李朝第二二代の正祖王が悲運に倒れた父莊獻世子の死に心を痛め、陵を守り、自ら参拝するために、父の花山陵の近くに建造した城郭街である。当時の科学者の努力と三七万人の労力により、約三年の工事期間を費やし、一七九六年の秋に完成された。城壁は八達山の稜線から山麓にかけて周囲五キロにわたっており、その城壁にそって南門の八達門をはじめ、北門、西将門、華虹門、蒼龍門、練武台、訪花随柳亭などがの諸施設がある。華城が完成した時には、正祖王によって首都を移転する計画までなされたが、それは周囲の反対で挫折したという。この華城が後に水原と名前を変え、日帝時代には、朝鮮総督府勸業模範場（現在の農村振興庁の前身）、蚕業試験所、李王職牧場、高等農林学校（ソウル大学農科大学の前身）などが設置され、朝鮮農業の中心地となった。以下、作品に出てくる場所について略述する。

・八達山…水原の背後に位置し、城内が一目で眺められる。その頂上に西将台がある。中腹に水原神社がある。

・四大門…八達門（南門）、長安門（北門）、蒼龍門（東門）、華西門（西門）をいう。八達門は八達山山麓の二層楼閣で、水原城を代表する門。その近くに市場（南門市場）があることから、水原を背景にした湯浅の多くの作品の背景になっている。

・華虹門…七つの石門からなっている水原最高の景勝地。旧韓国時代の一円貨幣にも印刷された風美明光の場所。それと隣り合わせに訪華随柳亭がある。湯浅の多くの作品に登場している。また、「カンナニ」では、朝鮮人に殺害された「野口をぢさん」の話が出てくるが、その野口巡查部長の追悼記念碑が万歳事件の後、在郷軍人会と警察の協力で華虹門の脇の芝生の上に立てられたという。

・華川…光教川、水原川ともいう。華虹門の下から水原城内の真ん中を流れる川。その川沿いに城内と城外の二つの市場がある。

・北池…萬石渠ともいう。北門の郊外にある蓮で覆われた景勝の池。

・市場…華川沿いに城内と城外の二つの市場がある。城内市場は城内の真ん中に位置し、おもに牛市場が中心になっている。現在の中央野菜卸市場。場外市場は八達門（南門）近くにある。現在の南門市場。市場は水原を描く湯浅のほとんどの作品にみられる重要なモチーフである。

・水原神社…八達山の南中腹にある、伊勢大廟の分神で一九一七年建立。百余の階段を登った社殿では水原城内が一望できる。そして神社の少し上の方に国旗掲揚台があった。

・練武台・東将台ともいう。蒼龍門の北にある将卒練武の跡。「カンナニ」ではカンナニの血にまみれた錢袋がこの近くで発見されている。

3 「カンナニ」と水原

「カンナニ」が発表されたのは、前述したように、一九三五年四月の『文学評論』であるが、この作品はもともと一九三四年二月末日縮切の『改造』の懸賞小説に応募していることから、実際に書かれたのは発表時期より若干さかのぼる。しかし、発表時においての「カンナニ」では、夥しい伏字があり、また作品の後半になる四十六枚分が削除されていて、その全体像を見ることはほとんど不可能である。幸いに、戦後の一九四六年、創作集「カンナニ」により、この伏字と削除の部分が復元され、そこには若干の異同がみられるなどの問題は残っているが(3)、おおよその全体像を見る事ができる。以下、その内容を簡略に紹介する。

世界大戦が終わって間もないころ、母とともに朝鮮の水原に移住してきた龍二は、カンナニという朝鮮人少女と友達になる。巡査の父親が水原の李根宅子爵邸の請願巡査を兼ねていたため、一家は子爵邸の一隅に住むことになったが、その門番の娘がカンナニであった。すぐ親しくなった二人は、将來大人になったら、お互いに婿と嫁になることを約束する。そして、二人は城門の外まで遊びに行ったり市場を歩き回ったりしながら親密さを深めていく。その中で龍二はカンナニを通じて朝鮮を少しずつ理解していくことになる。そんなある日、万歳事件が起こる。それを見にカンナニと一緒に出かけた龍二は、カンナニからモンロー主義や民族自決主義、そして万歳をとなえれば、朝鮮は独立できるといふ話を聞かされ、二人は万歳を叫ぶ。その直後、鎮庄に現れた日本兵によって銃が乱射され、教会に逃げ込んだ朝鮮人は教会もろとも焼かれてしまう。その事件の直後、カンナニが家に戻らないため、龍二は父と一緒にカンナニを探しに出かけるが、カンナニは見つからず、カンナニが龍二のために作っていた完成寸前の小錢袋が血塗れになって落ちていたのを発見する。これを見た龍二は、カンナニが日本兵に殺されたに違いないと断定する。

「カンナニ」は発表当時の編集者の付記からも窺えるように(4)、一九一九年の万歳事件が大きな時代背景になっている。そして、作品中の朝鮮人が逃げ込んだ教会が焼かれる場面は、水原で行われた堤岩里虐殺事件を思わせ、万歳事件で犠牲になる少女の死は、柳寛順のイメージとよく重なっている(5)。一方、作品舞台については、明示はされていないが、作品に出てくる固有名詞と町の情景から水原であることが簡単に推測できるようになっていく。つまり、この作品には水原で起こった万歳事件がおもに扱われており、それはほとんど疑う余地がない。し

かし、作品の中では万歳事件だけではなく、その舞台になる水原という町がさまざまな形で織り込まれており、それが作品の内容とも緊密な関係を保っている。まず、龍二の一家が水原に定着することになったのは、

四国の果の海辺の故郷の町で生鏝工場を鹹になつた父親は、はるばる朝鮮に単身職を求めにやつて来て、その頃としては職工生活などよりはずつと割のいい総督府巡査の口にありついた。月給はともかくとして、五割の植民地手当は有難いものだとも母親に手紙をよこしたのを龍二は聞いたことがあつた。丁度世界大戦が終つて間もないころで、朝鮮では憲兵制度が巡査に置きかへられ始め、物情搔然とした世相なので、巡査が大増員されて待遇もよかつた。

というように、龍二一家は日本ではこれ以上暮らせなくなり、いわば喰いつめてから朝鮮に渡つたのである。湯浅の作品に登場する朝鮮に暮らす日本人の多くが、日本を追われるようにして朝鮮に渡っているが、龍二一家も同様の事情で朝鮮を目指したのである。これは、湯浅自身の経験や当時の歴史的な事実とも重なっているが、それはともかく、龍二の父親は日本では職工で苦しい生活を余儀なくされていたが、朝鮮に渡つてからは総督府の巡査という支配階級にいきなり上昇している。それを母親は「内地にゐれば判任官四給俸の月収」だなどと誇りに思い、一家中は「父親の出世を喜んで団欒は賑かに楽しかつた」のである。さらにその父親は水原の李根宅子爵邸の請願巡査も兼ねていたため、屋敷と請願手当ももらえることになり、龍二を中学まで通わせることもできるようになる。このように龍二一家の安楽な生活はすべて朝鮮に渡つてから得られたものである。となると、龍二一家にとっての朝鮮というのは、今までの惨めな境遇を一変させる恵まれた土地で、とくにその中でも水原こそ、龍二一家に祝福された新天地だったということになる。

その水原で龍二はカンナニに出会うことになるが、カンナニ一家にとっての水原は、龍二一家のように必ずしも恵まれた場所ではない。カンナニ一家は李根宅子爵邸の門番という卑賤な身分に落とされてやつと暮らしているからである。しかも、カンナニ一家が最初から卑賤な身分であつたわけではなく、日本による支配が始まってから急激に没落している

私の家でもーとカンナニは云ふのである。一家を潰された。持つてゐた田畑はいつの間にか新しい地主のものとなつてゐた。そんなはずがないから刈入れをしてゐたら、巡査がやつて来て父をらうやに入れ、父がやつてゐた書堂は、悪いことを子供等に教へるからと戸を釘づけにしてしまひ、子供たちを無理やり

に普通学校に入れてしまった。それで父は昔出入りしてゐた李根宅に頼んで門番にしてもらつてやつと暮してゐる。

カンナニ一家が土地を失つたのは、総督府によって推進された土地調査事業によるものである。一九一二年八月の土地調査令の発布とともに本格的に始まつたこの事業は、申告による土地所有権を認定するものであったが、法律への経験と知識も少なかった朝鮮農民は申告をおこたり、土地を取りあげられたケースが多かつた(5)。カンナニ一家もこういうケースで日本人の「新しい地主」に土地を奪われ、父親は書堂の先生まで強制的に辞めさせられたのであろう。とすれば、龍二一家は日本から水原に移住してますます安定していくが、カンナニ一家はもとから水原に住んでいながらますます没落していく構造なのである。つまり、水原という街は、最初から二人にとって非常に対照的な街として出発したのである。水原はこういう根本的に対立した町の構造を内在しながら、また一方では、二人の友情をはぐくむ場所としてのさまざまな役割をも果たしているのである。

まず、二人の親しさを示す場所としての華虹門が登場する。作品での龍二とカンナニの話は、華川の河沿いから華虹門のほうに移動するところから始まる。結婚式の行列に会つて、その見物のために龍二とカンナニは華虹門をぐるりと回ることにしたのである。結婚式は華虹門の近くで開かれていて、それを見た二人はその美しい光景に感激する。二人がそこで見た花嫁の姿は、まさに「頭の王冠が金色にピカピカと光り衿の虹の色がひとときは可憐」な姿であった。それを見たカンナニは突然龍二に将来自分を嫁としてもらつてくれるか、と聞く。

カンナニは龍二の脇の下をつつきながら、

「ね、龍二」

と問ひかけた。

「五十円で買つてくれる」

「ああ大きくなつたら」

それで、友達のオンニョナーは、

「龍二は日本人だもの、お金がなくなつても結婚式できるよ。龍二は大きくなつたらお金持になるよ。日本人だから。カンナニは幸せな奥さんになる。ね、カンナニは幸せ者よ」

といつて二人をからかう。カンナニと龍二の親しい関係が一番よくあらわれたと

ころである。そして、その背景として華虹門が配置されている。華虹門は水原の城門のなかでも一番華麗な場所。「水原第一の勝地」とも言われているところである(7)。そこで二人がみた花嫁の「頭の王冠が金色にピカピカと光」る姿は、そのまま華虹門の「華」にあたり、「衿の虹の色がひとときは可憐」さはその言葉とおりの「虹」になって二人の将来を暗示するものになっているのである。つまり、華虹門という実際に華麗な虹の形をした門の前で結婚式を見物した二人は、またその花嫁の装束から華麗な虹色の華虹門を再発見したのである。それで二人も華虹門の近くでそのような将来を約束することになるのである。華虹門が二人の親密な関係を象徴する場所として実によく機能しているといえる。

その後、洪水のときには、二人は水原の城内を流れる河沿いに出かけ、家が流されたり、川辺でマクワ瓜を拾おうとした子供たちが洪水に巻き込まれるのを目撃する。それを見た龍二は、「鮮童たちがマクワのために、そんなに必死」になる理由がわからなかったが、カンナニに触発されるかたちで、「ずーと後になって龍二にもわかつてきた」りするのである。つまり、朝鮮の人たちの大部分は、「米の飯などはおろか満州粟や稗さへ、満足には食べられなかった」ので、夏はマクワを常食にしていたため、「そんなに必死」になっていたのである。龍二はこのようにして、徐々に朝鮮の事情を理解していくのである。そして、そういう理解に導くのがいつもカンナニだったのである。そのカンナニに感化されるかたちで、龍二のカンナニに対する気持ちと朝鮮への理解が深まり、それが時には行動としてもあらわれることにもなる。学校の帰り、「六年や高等科の悪太郎」たちが普通学校の朝鮮人の女生徒をいじめている光景を目撃した龍二は、それをカンナニだと思い、懸命に保護しようとし、さらに翌日の作文の時間には、そのことを取り上げ「可哀さうな子をいぢめたりする日本人を憎みます。そんな日本人は朝鮮から追い出したらいいのです」と猛抗議しているのである。

しかし、なによりも、二人の親密を深める恰好の空間が市場であった。市場は水原に住む日本人にはほとんど禁忌の場所で、水原のなかで唯一の朝鮮人だけの空間になっているが、その市場が龍二にとっては一番安心できる場所だったのである。それで、カンナニは「市の日にはきまつて四街里の街角に立つて」龍二と待ち合わせることにしていた。龍二にとって市場という空間は、そこに入る前には、周りが気になって落ち着かないが、一端「市場の中にはいつてしまへば、もう安心」できる世界なのである。そこには二人をいじめる「悪太郎」のような「日本人の小学生もゐるな」く、親など周りの日本人の目にも気がねする必要もない。その点、カンナニも同じで、市場こそ二人の友情とも恋愛ともつかない親密な感情を深める絶好の場所なのである。それで二人はいつも「市の日にはきまつて」市場に行くのである。その市場で龍二はさまざまな朝鮮人の生活を体験する

ことになる。家では禁止になっている棒飴や、ブッチギ（お好み焼きの一種）などをカンナニからご馳走してもらうところも市場なのである。また、なんの理由もなくただ一日中喧嘩をして朝鮮の人たちや憲兵に連行される独立運動志士を思わせるような青年たちもここで目撃することになる。そして、カンナニから朝鮮では好きな人に贈るといふ銭袋を作ってもらうことに約束してもらったのも市場の中であつた。

朝鮮の市場というのは朝鮮の街の中心になる場所である。とすると、水原の中心は当然水原市場になるのである。しかし、商店街を中心にする日本人からみれば、水原の中心と思われる市場はただの陰湿で汚い場所にすぎないのである。つまり、日本人と朝鮮人とは全くその中心が異なっているのである。湯浅文学には朝鮮の市場がよく登場するが、その市場こそ朝鮮の象徴的な場所である。「カンナニ」の中では、カンナニと龍二の親密な感情は市場を通して大きく成熟していく。そして、もっとも朝鮮的な場所であるはずの市場が、日本人の龍二にとっては親しみを感ずる一番「安心」できる場所だったのである。二人の親密な関係には龍二のこのような市場への親しみが大きく関係している。こういう市場に対する親近感、後の「粟」と「心田開発」での金太郎にそのまま引き継がれ、さらに「市場」という随筆の中で湯浅克衛の朝鮮への強烈な郷愁として定着することになる。とくに「市場」では、作者は子供の頃から市場が好きだったといながら、水原の市場についてこと細かく紹介している。また、そこには「悪太郎三人連盟」にいじめられ、その「くやしきや、淋しき」から、よく市場の空家に行つて慰めた記憶が述べられている。ほかに、市場は朝鮮的な空間として湯浅克衛文学によく登場する一つの原点にもなっているが、ここでは指摘にとどめておく。とりあえず、作品では、市場が龍二とカンナニを結ぶもっとも重要な役割をしているといえる。

このように、水原という街は二人の親密な関係を深めるのには欠かせない小道具として機能している。市場を中心にして、華川の川沿い、そして華虹門などがみなそうである。もちろん、これらの場所はいずれも水原市内にあり、正確にいうと二人の関係は城郭を中心にはぐくまれ、その城郭を中心にした街が彼らの世界のすべてだったのだ。前述したように、水原はもともと城郭の街として造られ、以後発展して広がるが、その原型はあくまでも城郭に囲まれた城内と八達門に隣接した城下の市場である。そして、城郭はちょうど卵のような形で街を囲んでおり、その卵の黄身にあたる部分が牛市場になっていて、それが川沿いにつながる形で八達門城下の市場まで延びている。カンナニと龍二の関係はこの城壁を中心にはぐくまれ、なかなか城の外を大きく越えない。つまり、城郭が大きな境界線になって二つの世界をくぎっているかたちなのである。

しかし、そんなある日の夕方、二人は北門を越えて北池に釣りに行くことになる。その時、峠の向こうで聞こえる豊年祭の銅羅の音に誘われ、その方に向かうことになる。

「行つて見ようよ」

カンナニが云つた。龍二は腰をあげて、峠に向つた。

「峠の向ふには、ほら、楽しい暮らしあるね」

「ああ、あるのんぢやろ、水原の街は、俺れ、嫌ひだ」

「ああ、いぢめられないところに行きたいね、龍ちゃんと二人だけで、いつも遊べるところに行きたいね」

そこで、二人は峠の向こうを目指すことになる。水原の外の峠の向こうに、水原より「楽しい暮らし」のできる理想的な場所があると信じたからであろう。しかし、その峠に着いてみると、「祭のさんざめきは又違った方向から聞えた」のである。それで今度はそこに着いてみると「その向ふの峠は、その峠よりも、もつともつと美しい」のだった。それでさらに二人は「又その峠に向つて歩く」ことになるが、しかし、いくら歩いてても、二人だけで楽しく過ごせる場所はすぐ手に届くような距離にありながら、なかなか現れてくれないのである。

そして夜が深くなつた。道もわからぬ藪、抜け出ることのできない森林が続いた。龍二とカンナニは心細くなつた。

いつの間にかお月さんが出てゐた。お月さんの方が多分水原の街なのであらう、玲瓏とお月さんは輝いてゐた。

龍二はお月さんの鏡の中に、母親の顔を見たやうな気がした。

突然、「こんなことしてゐたら、猛獣に食べられてしまふ」と思った。不安が急激な速度で胸の中を揺り動かした。

「帰るんぢや」

龍二はカンナニの手を取るなり、転ぶやうにして山を駆け降り、野原を横切り、河を渡つた。

結局、二人が目指した「楽しい暮らし」のできる場所はどこにもなかったのである。城門の外の「峠」の向こうに、そのような世界があると思つて目指したが、それはあくまでも一つの幻想にすぎなかつたのである。二人の幻想は、「夜」によつて破れ、二人は必死の思いで水原に戻ってくるしかなかつたのである。つまり、二人にとって城門の外の世界は、一見幻想的に見えるが、実際は深い「夜」

の「道もわからぬ藪」の「抜け出ることのできない森林」の世界だったのである。結果的に城門のなかこそ二人が一番安心できる場所だったのである。

しかし、このような二人の関係をはぐくんだ水原の街が万歳事件をきっかけにして大きな転換をむかえることになる。万歳運動が始まってから何日か経って、「街の騒々しい声も」雪で「ぴたりと」静まったある日、二人は「山」に登って市内をながめることになるが、そこで万歳運動を目撃することになる。

さう思つて見てみると、城門の向ふの小丘にも、河をへだてた小松林の原にも、白い衣の人たちが屯してゐて焚火をたいてゐた。そのあたりから、次第に「朝鮮独立万歳」の声が街の谷を渡つて、山に響いてきた。

二人が登った「山」は水原の背後を取り囲んでいる八達山であろう。その頂上から見た「城門の向ふの小丘」と「河をへだてた小松林の原」は、作品の内容と実際の水原の万歳運動の記録から推察すると、おおよそ八達門から孔子廟あたりと練武台や蒼龍門のあたりになると思われる。実際の水原の万歳運動の記録には、三月一日の大規模な示威以降「約二週間の小康状態が続いたが、三月十六日の市の日を利用して八達山の西将台に数百名が集まり、また東門のなかの練武台にも数百名が集まって示威をした」という(∞)。カンナニと龍二が八達山に登ったのは、ちょうどこの時期にあたるであろう。そして、いよいよ万歳運動が広がり、それを鎮圧する日本兵の銃撃が始まる。それで二人は教会のほうに向かって避難するが、教会の中には入らず、方向をかえて逃げることになる。しかし、「白衣」たちが逃げ込んだ教会は日本兵によって焼かれることになる。これは四月十五日に起こった堤岩里の虐殺事件から題材をとったものであるが、堤岩里は水原市内ではないが、作品ではそれが水原市内に設定されている。そして、教会も八達門と孔子廟の間にある実際のフランス教会があてられている。となると、作品での万歳事件では、朝鮮人と日本兵がおもにこの場所の近くで衝突したことになる。内容の順序からは先になるが、作品では小学校の悪太郎たちが普通学校の女生徒をいじめる場面があるが、そのいじめる場所もこの辺に設定されている。今日でいうと、八達門と孔子廟の間でやや八達門よりの城外になる。朝鮮人が通う普通学校は城内（現在の新豊初等学校）にあり、日本人が通う小学校は城外（現在の水原初等学校）にあるので、城内に住む日本人生徒と城外に住む朝鮮人生徒は自然にこのあたりでぶつかることになっているのである。また万歳事件の当日、学校の帰りの日本人生徒と朝鮮人生徒が集団で取っ組み合いをするが、その場所もこの辺に設定されている。とすれば、八達門外から孔子廟の間は、朝鮮人と日本人の衝突の場所、おもに朝鮮人が虐待される空間としてはたらいっているということ

になる。

そして万歳事件の後、家に戻らないカンナニを探しに父と街を出た龍二は、華西門（西門）から長安門（北門）と華虹門を経て練武台に至り、その近くの松林の中からカンナニの血にまみれた小銭袋を発見する。カンナニは練武台の近くで殺されたのである。練武台というのは、その名前のとおり、兵士を訓練する目的で作られた場所で、「古は将卒ここに武を練りしところ」であったという(86)。カンナニが日本兵に殺された場所は、このように非常に軍事的な性格のつよい場所だったのである。

以上からみるように、カンナニと龍二の親密な関係は水原という場所を抜きにしては語れない。水原という街が二人の関係を維持させ、それを深めていたのである。しかし、水原という街は、二人にとってそれぞれ違う土台に立っている街なのである。龍二一家にとっては新しく発見した安住の場所、カンナニ一家にとっては安住の地からしだいに窮地に追い込まれていく場所なのである。この根本的に対立した、もろい土台のうえで二人の関係は設定されていたのである。そして、表面的には城門が二人の関係をはぐくむ、あたかも一つの母胎のようなものとして、二人を城門の外の世界から守ってくれる役割をしている。水原に住んでいる時には、街の外の世界に幻想を抱いて城門を出ていくが、一端出てみると、外の世界は不安と危険に満ちた世界ですぐもとの城門の中に戻ってくるからである。しかし、このような二人にとってあたかも母胎としての役割をしていた水原という街が万歳事件によってカンナニが殺されることになり、その一方が大きく崩れることになる。つまり、カンナニのいない、龍二だけの水原になってしまったのである。表面的には二人をはぐくんだ水原の街ではあるが、朝鮮人であるカンナニを守る母胎ではなかったのである。それは最初から水原という街の構造のなかに内在していた問題で、それが具体的に現実化された形でカンナニの死として現れたのである。

4 「焔の記録」と水原

「焔の記録」は、雑誌『改造』の第八回創作懸賞募集に応募し、二等入選作として選ばれ、同誌の一九三五年四月号に掲載された作品である。同年同月の『文学評論』には「カンナニ」が掲載されているから、氏の処女作としての二作が同時に発表されたことになる。しかし、「カンナニ」の場合は、前年の『改造』第七回創作懸賞募集に応募していることから、実質的には二作の間は一年間の時差がある。湯浅克衛文学の出發を論じるときには、この一年の時差が一つの問題になる。

すでにこの問題を捉えるかたちで、任展慧は、「カンナニ」の「惨憺たるかたちでの発表によって」、湯浅克衛は「ただちに転向小説『焔の記録』を書いてみせ」たとし、「焔の記録」によって「湯浅克衛の実質的な作家生活がはじめられた」と指摘している(19)。一方、最近の池田浩士は、「カンナニ」を処女作としながら、「焔の記録」をひとつの「すぐれた転向小説」と評価し、出発と転向が同時に始まる湯浅文学の奇妙な時代背景について言及している(20)。いずれの先行研究も「焔の記録」をひとつの転向小説として論じていることに共通している。とすると、この一年の間に転向にあたる相当の変化が湯浅克衛自身にあったということになる。しかし、本稿ではその転向問題については本格的に論じない。

「カンナニ」に引き続き、水原という街がどのように捉えられているかをおもに考察する。そのなかで一年間の変化をも自ずから明らかになるであろう。

「焔の記録」の話は、左翼運動に関わり東京で服役中だった主人公の町田縫子が、義母の死によって釈放され、日本から朝鮮の水原に帰郷する間の回想のかたちで進められている。そして、その回想の中心をなしているのが、義母と縫子の二人が朝鮮に渡って定着するまでのさまざまな苦難の話である。福岡県の貧農出身である義母は、跡取りができないため、妾の女中代わりに使われながら散々な暴力に悩まされたすえ、最後には一方的に離縁されてしまう。家にも実家にも居られなくなった義母は、幼い縫子を連れて朝鮮に渡ることになるが、その義母が朝鮮を発見したのは、まさに死を決意した瞬間であった。

追つめられ絶望した母親は思ひ余つて身を投げやうと海岸に出た。すると一度その日は秋の晴れ渡つた空で、近くの島々は紅葉に色づき、遠く水平線に長く夢のやうに霞んだ島が母親の死を翻意させた。沓岐対馬の向うに朝鮮半島がある。と云ふ。あの夢のやうに霞んだ島は、今、何か発展に沸き立つてゐると云ふ朝鮮なのであらうか。と母親は思つたさうである。

どん底まで追いつめられ、ほかの選択の余地がない時点での発見が朝鮮だったのである。その朝鮮は「夢のやうな」島として、義母をして「自分はここで一旗あげるのだ」と決意させたのである。そして、その期待として、「案外ポロイ仕事がつてゐるかも知らぬ」という「夢」をもって朝鮮に渡ったのである。

しかし、実際釜山についてみると、朝鮮での生活は彼女が考えたやうな甘いものではなかった。糞便と海草の腐った臭いがする釜山の朝鮮人街に居を構え、玄米パン売りから始め、沖仲仕を経て、遊廓に自ら身売りもしたが、釜山での生活は安定できず、自殺まで考えるほど生活は悲惨きわまるものであった。それに耐えられなくなった二人は、釜山を捨てて放浪生活を始め、渡り芸者をしながら釜

山から三浪津へ、三浪津から密陽へ、密陽から金泉へと北上することになる。その北上の旅はさらに金泉から大田へ、大田から天安へ、天安からいよいよ水原に至る。そして、その水原で二人は奇跡のような好運に恵まれることになる。義母がお座敷でたまたま地主に巡り合い、その後妻になったが、当の地主が一ヶ月も経たぬうちに死んでしまい、莫大な財産がそのまま転がり込んだのである。義母が最初朝鮮を指摘した時に夢見た「案外ポロイ仕事」が水原でまさに奇跡のように実現されたのである。

地主の死によっていきなり大金持ちになった二人は、これまでとは想像もできない生活が得られる。縫子は京城の女学校に通わされ、「総督府の高官の娘達に交つても少しも引けを取らない」高級な生活を送り、義母は地主になって、夜には鉄砲をもって果樹園を警戒しながら飢えて果物を取りに来る朝鮮人に発砲したり、小作争議の時には日本で自分を苦しめた法律を盾にして朝鮮人の小作人たちに断固たる措置を取ったりする。苦境の時にはさまざまなかたちでの朝鮮人との関係によって支えられてきた義母であるが、地主になった途端、急激な変貌をみせることになる。このように、水原でまさに奇跡としかいえない好運によって二人の生活は急変し、また朝鮮に渡ってはじめて生活の安定が得られたのである。そして、なによりも二人のこのような生活の急変を可能にしてくれたのが水原という街であった。母親が夢見た「案外ポロイ仕事」は水原以外の街にはなかったのである。釜山から二人はさまざまな街を辿ってきたが、それらの街ではいずれも散々苦勞を重ねただけだったが、それが水原という街に着いた途端、すべての好運がいきなり転がり込んでくるかたちになっている。とすれば、水原こそ二人にとって天恵の場所であったということになる。このような構造は、湯浅克衛が描く朝鮮を背景にした作品においての一つの特徴として現れているように思われる。すでに考察したように、「カンナニ」の中でもこういう構造を見ることが出来る。龍二一家が安定できたのは水原に着いてからなのである。さらに、「城門の街」「故郷」などの登場人物もみな水原に来て定着するかたちになっている。しかし、それが水原以外の場所になると、水原でのような安定は得られなく、散々な苦勞を重ねる場所として描かれる。こういう構造をよく示しているのが、「移民」と「根」である。この二作は湯浅克衛の作品にはめずらしく、興南と清津を背景にしているが、そこに移住した日本人はその土地にほとんど定着することができない。しかも、水原に定着した日本人のように、「案外ポロイ仕事」を見つけないことも全くない。以下、この二作について少し検討してみる。

一九三六年七月号の『改造』に発表された「移民」は、朝鮮総督府の移民として興南に定着することになった松村松次郎の一生が語られている。彼は「明治四十三年の早春」に「第何回目かの朝鮮移民」として、当時は荒野だった興南に妻

を連れて移住することになる。鳥取県の境港から船が朝鮮に向かう時には、「お前は大地主になれ、俺は風来坊から大金持になってやる」と豪言する川手儀助の言葉に刺激され、松村松次郎は朝鮮で「大地主にならう」と決心して渡ったのである。しかし、すでに「南鮮や中部は甘い汁が吸ひ尽されて」いて、松次郎の移民先は北鮮の咸興から近い海辺にあてがわれるが、そこに着いた瞬間、彼の夢は無惨なかたちで敗れてしまう。彼に与えられた土地は、とても農業には適しない酷い荒地地だったのである。しかたなく開墾していくが、なれぬ環境での無理な仕事がたたり、女房は長い病気の末亡くなる。また、不作で「二十五年間の年賦はもう二年間も滞納」し、そのうえ、女房が残した「医者や薬代で又二年間が借越」となった松次郎は、ほとんど生きる意欲を失い自殺を図るまでに至る。そこには、水原での「カンナニ」の龍二一家のような、または「焔の記録」の母娘のような好運は全くと言っていいほどない。その後、松次郎は朝鮮人の女性と結婚して、朝鮮人の地域社会に尽くしながら、晩年にやっと念願の土地を手に入れるが、その土地さえも興南窒素肥料工場の社員住宅の敷地になり、手放さなければならなくなる。さらに、残った土地も工場の亜硫酸ガスで農業ができず、ついに氣力が尽きて死んでしまう。この松次郎の一生から見ると、彼は最後まで興南で安楽な生活を得ることができなかったのである。水原に移住することになる日本人たちが簡単に「案外ポロイ仕事」を見つけて定着するのに対し、興南に移住した松次郎の場合は、一生を苦勞のなかで暮らし、最後までまともに定着することもできないのである。水原と興南という場所の違いによって、そこに移住した日本人の生活に大きな違いが生じてくるのである。この特徴は、「根」のなかでもより具体的なかたちで現れているが、その前に、「移民」での移民について簡単に触れておく。

朝鮮で日本人の移民が本格的に始められたのは、明治一九一〇年、当時設置されたばかりの東洋殖産株式会社の推進によるであった。第一回移民としては、一九一〇年、一六〇名が選ばれ、朝鮮の南部地域を中心に移住させられた。それを皮切りに以後漸次増え、一九一一年の第二回は七二〇名、そして一九一二年からは千人を越える単位で急上昇し、一九一五年から徐々に減り始める傾向である(二〇)。 「移民」の中での松村松次郎は、「明治四十三年」の「第何回目かの朝鮮移民」として興南に移住したことになるが、実際においては第一回移民にあたる。そして、第一回目の移民のすべては朝鮮の南部地域に移住させられているが、作品ではそれが北鮮の興南に設定されているかたちになっている(二一)。また、作品では、松次郎が二五年償還の三町歩の土地を払い下げられ、初年度からその年賦の納付に散々な苦勞をすることになっている。しかし、実際の東拓の移民の場合は、甲種と乙種に分けられ、その返済額の違いはあったが、いずれも五年据

え置きの二七償還になっているから、初年度から返済する必要がなかったのである(一七)。さらに、甲種(第一種移住民)は、田畑二町歩内外の自作農で、乙種は(第二種移住民)田畑五町歩内外の土地を一町歩以上の自作と小作を兼ねたというから、三町歩を自作している作品の松次郎は、この甲種(第一種移住民)の移民として来鮮したことがわかる。

一九三八年一月号の『新潮』に発表された「根」は、失業と失恋で東京を逃げようとして清津に渡ってきた室戸新吉と、通信部の記者として七年間も清津に在留している松林の話が中心になっている。室戸新吉は東京で大学卒業以来の三年間の失業と失恋で「何処か遠いところで新生を拓く」と思っていた矢先に、たまたま清津での「仕事が降つて来た」ので、「北の涯で自分をたたき直さう」と思って朝鮮の清津を目指したのである。再生のきっかけをつかむための清津行だったのである。しかし、実際清津に着いてみると、そこでの生活は、彼が期待していたようなものとはほとんど懸け離れたものであった。街には「石油臭い濃霧」が一年中立ちこめていて、街はその「濃霧」の雰囲気にとんと支配されていたのである。清津に着いた室戸新吉は、清津在住七年の松林と出会い、彼からその生活の一端を聞かされる。

「死んだ顔になりますよ。刺激がない。相手は濃霧ばかりだ。手応へがない。何を云つてもぶつぶつと泡を立てて濃霧の中に融けてしまふ」

松林から聞かされた清津での生活は、なにか要領のつかめない、しかもほとんど実感のないものがある。その中で日本人の「八十パーセント」が胸をやられ、その半分が「毎年ばかり死んで」いくという。よほどの「覚悟」を持って「腰を落ちつけなければ」「気が狂つてしまふ」土地が清津だということである。当然、日本人にとってはとても定着できる場所ではなく、ただの出稼ぎ場所以外には考えられてない。その清津の現実を松林は次のように言う。

「出稼ぎ根性を止めないうちは、日本は土地を広げても、その土地に復讐されるんだ。え、咲公、さうぢやないか。羅津が景気がいいと聞くと羅津に行く。牡丹江が派手だと云へば、今隆隆の牡丹江に流れて行く。それぢや、まるで根無し草ぢやないか。根無し草が流れて街になつてゐる間は土地は固まりつこはない。いつもぶくぶくの埋立地だ。」

このような、ほとんど安住することのできない清津での鬱塞した生活のなかで、日本人たちはその現実から逃れるため、なにか「どかんと」したことをやらなく

ては済まない状況まで追い込まれる。案の定、△どん亀▽は大鱈にほとんど自殺行為のつもりに飛び込み、室戸新吉もそれに似た「どかんと」したことを夢見る。しかし、清津でのこういう日本人の生活とは裏腹に、そこに住んでいる朝鮮人の漁夫たちは「踊り狂」いながら豊漁の喚声を上げている。そして、作品の最後には、そういう「根を下ろした者達の歌声が、室戸新吉の胸を激しく揺ぶつて」いくという話である。

「根」という作品から見ると、清津での日本人たちはその土地に△根▽を下ろしてはいない。そこに△根▽を下ろしているのは朝鮮人だけで、日本人たちは△根無し草▽のように流れているだけなのである。そして、なによりも清津で日本人たちを△根▽付かせないのが、冬の長さで濃霧である。とくに濃霧が清津の大きな特徴になっており、日本人は「ぱたりぱたり」と倒れるか、あるいはほとんど発狂の状態に至ってしまうのである。しかし、朝鮮人はいきいきとして生を営んでいる。水原とは全く対極をなしている街で、日本人が定着していくにはいかにも厳しい場所として清津は設定されているのである。

しかし、作品での清津のこういう姿は、大きく誇張されたもので、実際の清津の環境とは全く懸け離れたものである。清津は冬こそ寒さが厳しいが、それも作品でのような、一年のうち三ヶ月しか活動できない場所ではないからである。冬の4ヶ月間は平均気温が氷点下に下がるが、それ以外の季節は零度以上にまで上がったっており、その平均気温は中部の内陸地域とそんなに差はないのである(25)。また、濃霧のことであるが、一九三三年の清津の気象表を見ると、四月から八月の間には霧が発生しているが、それ以外の季節には全く発生していなく、その霧も初夏から夏にかけての一般的なものである(26)。作品でのような、ほとんど一年中の濃霧のようなものではないのである。さらに、清津の緯度にしても大泊(コルサコフ)の対岸に設定されているが、実際はそれより遙かに南の方に位置している(27)。このように、「根」のなかには、清津の街が日本人の定着には困難な場所として、わざとしか思えないくらい大きく誇張されている。その根底には水原以外の街では安定できないという湯浅克衛文学の一つのパターンが投影されているように思われる。

さて、「婚の記録」では、水原に定着した義母は地主として安定していくことになるが、縫子は農場実習に来た水原農林学校生の融と知り合い、東京に出奔してしまう。日本女性を「被圧迫階級」として捉える融の意見に共鳴した縫子は、彼に誘われるままともに左翼運動に携わるが、その活動のなかで、階級戦の組織内でも女性差別が根強いこと、組織員たちの狡猾な一面などを体験する。しかし、なによりも東京での地下潜伏生活は悲惨そのもので、融は一年以上も消息不明になり、彼女自身は病身を耐えながら戦ったが、最後には裏切られて逮捕される。

その後、長い留置場の生活から身体はさらに蝕まれ、ついに転向声明書に拇印を押すことになるが、ちょうどその時、水原の義母の死に、彼女は病身の身で釈放され朝鮮の水原に戻るのである。

最初、縫子が水原を夜半逃走した時には、新しい東京の生活に「大きな希望に駆り立てられて」いたのである。その東京での生活は、相愛している融の側にいられるのはもちろんのこと、日本女性の「被圧迫階級」としての問題にも本格的に取り組むこともできる希望の世界だったのである。それに比べれば、水原での生活は、地主になって急激に変貌した義母との日常的な反復と、その貪欲な母の仕事を引き継がなければならないという現実的な生活以外にはなかったのである。その現実的な水原の生活に圧迫されて、縫子は水原という街を捨てて、「大きな希望」を抱いて東京に向かったのである。しかし、その東京で彼女を待っていたのは、今までの「希望」を打ち砕く厳しい現実であった。その厳しい現実の前で彼女は完全に破れ、最終的に転向を余儀なくされたのである。結局、彼女が水原を捨てる時に夢見た「大きな希望」は水原の外の世界にはなかったということになる。そして、再び水原に戻らざるを得なくなったのである。それも病身を抱えながら、散々敗れたかたちでの帰郷である。これは、「カンナニ」でのカンナニと龍二が、北門外の「峠の向こう」に「楽しい暮らし」があると夢見て歩き回り、夜になって「必死の思い」で水原の城郭を目指して帰ってくる場面とほとんど重なっている。取りあえず、水原に帰ってきた縫子は、「闘争にも生活にも、肉体にも敗れて」、母の棺が燃え上がる焔を呆然と見つめながら、その炎から異様な感動を受けることになる。それは母の激しい生き方への共鳴である。そして、最後の暗示的な場面にいたり、義母の燃え上がる亡骸が「立ち上れ、起き上れ」と叫びかけているとの錯覚にまみれた縫子は、その「絶えず格闘し乍生きて来た」母の「魂」を引き継ごうとするかたちで、大きく口をあけてその焔を飲み込もうとするのである。

「焔の記録」の最後の暗示的な結末の場面を取り上げて、任展慧は、「義母の生命力の強さを認識し、その強さをわがものとすることに再起の望みを托そうとする縫子の姿には、彼女が、義母の遺した農場を引き継いでいくにちがいない暗示がある」と指摘しながら、それは「「先駆」的であった植民者一世への賞賛の思いにつながる」ものとして、湯浅克衛文学の「視点の欠落」を強く批判している(18)。一方、池田浩士は『カンナニ』の「解説」で、任展慧の説の一面を認めながらも、「解体した運動の再建のために自分自身をもう一度たてなおそうという決意の焔を吹き込んだ」ものとしての解釈を試み、その延長戦で「すぐれた転向小説」と指摘している(19)。しかし、すくなくとも、この作品を「すぐれた転向小説」として捉えるのは相当の無理があるように思われる。なぜかというと、

この時点での湯浅は一人の作家として登場もしていないからである。ほとんど処女作に近いこの作品が転向だとすれば、転向以前が説明できないからである。また、氏が『人民文庫』事件に関係して検挙されたのは一九三六年の十月のことで、「焔の記録」発表より一年半の後になっており、その間にも「聚」や「心田開発」のようなきわどい作品を発表しているからである。池田浩士は、すぐれた転向文学の「もっとも大きな意義のひとつ」として(20)、『

表明された転向を既定のものとして、実質的な転向そのものとして自己に認めさせようとする自分自身に抗して、許容される限界ぎりぎりの表現を使いながら、自己再建のメッセージを、作者が読者と自分自身とにたいして送りつけ、送ることにはほかならない

と指摘しているが、「焔の記録」に至るまでの「表明された転向」や「実質的な転向」は確認できなく、作品の中でも「作者が読者と自分自身」に「自己再建のメッセージ」を送っているとは思えないからである。つまり、縫子と作者自身の結び付きがほとんど窺えないのである。このことから、「焔の記録」での転向は作品の時代的な素材にすぎなく、それがそのまま作者の心理と密接に結びついているものとは思えない。作品では縫子が転向してから水原に戻っているが、重要なのは転向それ自体ではなく、水原を離れてから散々敗れて水原に戻ってくる構造なのである。転向はその素材にすぎなく、極端にいえば、その構造さえ満たしていれば、別に転向のかたちでなくてもかまわないように思われる。同様の意味で、この作品を「植民者一世への賞賛」や「一世への訟歌的傾向」の作品として捉えるのも危険であろう。水原を離れてまた水原に戻るといふ構造が、ただちに「一世への賞賛」と一世の仕事そのまま「引き継いでいく」ことを意味するものではないからである。

以上、見てきたように、「焔の記録」のなかでは、「カンナニ」に引き継いで水原が重要なモチーフになっているといえる。そして、水原という場所は、日本人が「ポロリとして仕事」を見つけて、簡単に安定していく空間として設定されている。その構造によって、義母と縫子は最終的に水原に至り、突然地主として定着していくことになる。しかし、それが水原以外の場所になると、「根」と「移民」で見たように、なかなか安定できなくなる。そして、縫子はこういう水原での安定的な生活を捨てて、東京に夢を抱いて出奔することになるが、最終的には精神的にも肉体的にも敗れてまた水原に戻ってくる。そして、その水原で彼女はもう一度再起を図るのである。母の亡骸が燃え上がる焔を前にして、彼女は大きく勇気づけられ、再生への力を獲得していくことになるのである。あたかも

水原が大きな母胎のように彼女を包んで、精神的にも肉体的にも敗れた彼女を癒し、再生へ導く形になっているのである。その大きな母胎としての水原は、実際の母の像とも重なるかたちで縫子の再生に深く関係しているように思われる。

5 異郷から故郷へ

『人民文庫』の一九三六年十二月から連載された「城門の街」は、湯浅克衛の最初の長編小説である。小品「元山の夏」には、「私が今書こうとしてゐるある街の変転の歴史」という、この作品の予告にあたる部分が見えることから、「城門の街」は割合早い時期に、しかも相当の意気込みで計画されたものと推測できる。しかし、作品は一九三七年五月号の第五回分を最後に中断され、以後未完で終わってしまった。そして、作品の冒頭には一九一四年に刊行された『発展せる水原』の緒言が大きく引用されている。

―遮莫、恚うして果敢ない歴史を語る水原も、再び開拓せらるべき機運は京釜線の敷設によりて開かれ、更に統監政治の起るに及んで赫灼たる光明は前途に輝き、次いで併合の事なりて、愈々茲に水原の動かすべからざる基礎は樹立され、同時に将来発展すべき素質を確保したのである。

「城門の街」が書かれた一九三〇年代は、宇垣総督の農村振興計画、心田開発運動などの諸政策により、少なくとも表面的には朝鮮全土が飛躍的に生氣躍動し、新しい様相を呈していた時期である。その三〇年代の表面的な躍動と発展ぶりが二十年前に刊行された『発展せる水原』の題目や視点と重ね合わせられるかたちで、作品の冒頭に大きく取り入れられたのであろう。『発展せる水原』はその緒言からもわかるように、水原の永い歴史のなか、日本統治以来の、日本人と関わる街の歴史が中心的に叙述されたものである。つまり、「発展せる水原」が扱うのは、あくまでも日本人の「変転の歴史」であって、朝鮮人の「変転の歴史」ではないということである。このような視点で書かれた『発展せる水原』を、しかもその視点の宗旨をなす部分を作品の冒頭で引用したことは、「城門の街」で描こうとする水原の「変転の歴史」の土台と方向性を自ずから示すものである。

「城門の街」では、日韓合併以来、水原に移住することになる日本人の歴史が、作者の父をモデルとした凡平といういかにも平凡な日本人の視線を借りて描かれている。その凡平とは対照的な人物が同業の岸和田屋として登場し、この二人を幾人かの朝鮮人が取りまくというかたちになっている。まず、主人公の凡平がこの街に定着することになったのは、万歳事件の直前、陸軍中尉としてこの街の守

備隊長に赴任したことがきっかけであった。彼は三年間の兵営生活のなかで「すつかりこの街が気に入ってしまった」ので、退役後、この街での定着を決心したのである。街の中でもとくに「一番気に入ったのは華城と呼ばれる城郭」で、街が城郭に囲まれていることが定着を決めた大きな理由のひとつであった。そして、海産物会社の代表取締役支配人として生活が安定するやいなや、「終生の地、終生の業として腰を落ちつけやう」と決心し、内地から妻子を呼びつけたのである。しかし、内地からこの街に来た妻の里江は、「違つた風俗の街が住み悪いらしく」なかなか馴染めなく、いつも「三千円溜つたら帰りませうよ」と口癖のように郷里に帰ることばかり考える。そのなか、凡平自身も朝鮮人の株主たちと番頭の岸和田との軋轢で、日本へ引き上げることを考えたが、ちょうどその時、関東大震災が起こる。その事件がきっかけで凡平は内地に帰るのを断念し、この街で「一旗あげやう」と決心し、雑貨屋を開くのである。それに対抗するかたちで、前の番頭は岸和田屋という雑貨屋の看板を上げ、商売においての競争関係になり、以降さまざまな葛藤を引き起こすことになる。しかし、二人のこういう対立は、あくまでも日本人社会内部の部分的な事件にすぎなく、街全体から見ると、二人は同じく水原に住む日本人としての生活空間を共有している人物といえる。そして、このような水原での日本人たちを取りまくおもな空間が神社で、作品ではこの神社にまつわる事件が大きく取り上げられている。

神社は八達山の南中腹にあり、そこへ登ればこの街全体が一望できる場所に位置していた。その神社を凡平は、兵隊生活の習慣として朝五時に起き、寝巻きと地下足袋の姿で、「暗い街を五六町ある神社まで駆けて行き」参拝の後、「裸のまま体操」を日課にしている。これを「六七年も、一回も休まずに」続けており、その神社での朝が凡平にとって一人だけの「極楽」の時間であったが、それがたまたま丑の刻の参りに来た街の芸妓を驚かしたことでみなに知られる。そのため、日曜日毎に凡平に連れられて神社に行った息子の太郎は、校長から表彰され、朝の神社参拝と体操がこの街の小学生全体に広がることになるのである。小学生たちが合唱をしながら八達山中腹の水原神社の階段を駆け登るのである。

小学生は駅前、城外、城内と三班に別けられ、午前五時半、白鉢巻をした白虎隊のやうな少年達が、各班毎に集つて、果樹園の一番合戦の家の前に合流し、それから隊列を作つて、神社の高い石段を――

胸に燦く、三角章・・・・・・・・・・

水原神社は、「伊勢大廟の分神として大正六年十月二十九日に建立遷宮し奉つ

た」ものである(21)。神社のすぐ上の山の頂上には、大きな国旗掲揚台があり、掲揚塔にはいつも「日の丸の大国旗が翻々と」翻っており、その模様は「心田開發」や戦後作「旗」の中で窺える。また、この国旗掲揚台と神社の間には、日清戦争のとき「朝鮮人に糧食を奪はれたので、その責任を感じて自刃」した中佐の追悼記念碑が立っていたことも「旗」の中から確認できる。そして、神社のすぐ右下に水原小学校がある。この位置関係から水原神社を取りまく空間が、日本精神の高揚と密接に関わっていることがわかる。水原市内を見下ろすかようにして、国旗掲揚台、追悼記念碑、神社が位置しているのである。そして山麓には官庁街と官舎、道路の向こうには、「葉山桃子」の小野が勤める禪宗の「法正寺」がある。つまり、八達山の南中腹はほとんど日本人の空間になっているのである。その中で朝鮮人の空間といえば、教会と昔からの孔子廟くらいである。しかし、その教会は「カンナニ」でみるように、万歳事件で焼かれる設定になっている。また、孔子廟は「葉山桃子」では餓鬼大将の松本が主人公の繁太に制裁を加える陰惨な場所として設定されている。このように、水原神社は作品でも実際においても、水原の日本人の求心点になる空間である。しかし、「城門の街」での凡平は、水原の球心点といえる神社に「六七年も、一日も休まず」に通うくらいの非常に誠実な人物として描かれている。もちろん、それはあくまでも、水原に住む日本人としての誠実さである。同じく水原に住む朝鮮人から見ると、凡平の誠実さは異様なものに見えたであろう。八達門外の四街路から神社までの五六町の距離を、「地下足袋」を履いて、「寝巻」姿で走るのは朝鮮の風俗からすれば尋常なものではないからである。しかも、神社の境内では寝巻きさえ脱ぎ捨て「裸のまま体操」をし、未だ明けきらぬ市内を見下ろしながら、「えーい」とか「おーう」とか、「前へ進め」と大声を上げているのである。まさに、水原市内を眼下に置き威圧するかのような姿勢である。その凡平の儀式が日本人の芸妓に見つかり、最初は「四目入道」だと騒ぎ立てられるが、水原に住む朝鮮人の目からすれば、それはまさにある日突然現れた「四目入道」以外のなものでもなかったであろう。

このように、湯浅克衛が描く朝鮮には、その地にもとから住んでいた朝鮮人の視点が欠けているところがある。それは、よく指摘されているように、朝鮮人の登場人物が見あたらず、また朝鮮人の人物はおもに使用人として、しかも日本名で呼ばれているという具体的な事実からだけではなく、より根本的な植民者としての認識の欠落があるように思われる。しかし、これらの認識の欠落は、後の満州開拓を扱った『遙なる地平』や『二つなき太陽のもと』になると、全く様相を異にしている。満州開拓を扱っているこの二作は、最初から植民者としての認識があり、それが満州と中国人への配慮とつながっているからである。このような朝鮮と満州への認識の違いは、湯浅個人の視点というより、それぞれの植民

の背景が大きく影響しているかのようと思われる。満州は日本の支配下に置かれた国ではあるが、いちおうは日本とは違う国家と民族の構造があるから、どうしても現地への配慮と日本人植民者としての自己認識が要求されたのである。しかし、朝鮮の場合になると、ほとんど日本の延長線にあるひとつの特殊な地方としての異郷にすぎないという認識である。朝鮮が日本の中のただの異郷であるとすれば、朝鮮人という新たな視点を設ける必要性もあまりなくなってしまふ。また、他民族の存在を想定する日本人植民者としての自己認識もあまり要しなくなるのである。むしろ必要なのは、異郷に対する「望郷」の心くらいであろう。

以上、考察したように、凡平はこの城郭の街が好きで、また、この街で「一旗挙げやう」と思って水原に定着している。退役し、海産物の取締役を経て雑貨屋を経営し、いちおう表面的にはこの街で生活の安定を得ている。こういう凡平の像は、今まで見てきたように、水原で「ポロリとした」仕事を見つけてこの街に定着していく日本人の造形とほぼ重なっているといえる。つまり、水原が日本人の母胎として働いている構造なのである。そして、その構造が「城門の街」では、神社を中心にした日本人たちの空間として拡大されている。今まで考察した「カナンニ」「焰の記録」の二作が主人公の個人的な母胎としての水原であるとすれば、「城門の街」は水原に住む日本人全体の母胎としてその役割が広がっているのである。その結果、水原に住む朝鮮人の視点は全く排除されたであろう。日本の延長としての朝鮮は、朝鮮人の視点の必要性をなくし、それがまた日本人だけの母胎を造り上げることになったといえる。しかし、このような日本人の母胎としての水原は、そこに住む日本人にとってはあくまでも異郷にすぎない。いくら安定しても最初から故郷にはならないのである。そこで強烈な望郷の念が起こる。その日本人たちの郷愁を描いたのが後の「望郷」なのである。

『改造』の一九三八年五月に発表された「望郷」は、その登場人物や背景、事件の内容において、「城門の街」とほとんど類似している作品である。その初出の末尾には「昭和十三・四・九」という脱稿の日付けが付記されているが、「城門の街」が前年の五月の第五回分で中断されているから、その中断からほぼ一年後の作品ということになる。そして、「城門の街」と「望郷」はその内容の類似性から、長編小説として計画された「城門の街」が中断された後、その内容の一部を短編小説として仕立て直したのが「望郷」のように思われる。

「望郷」での話は、作者の父親をモデルにした吹矢吾助が水原で食料雑貨商を経営するかたわら、水原の商工会議所の会頭と青年団の団長を勤める人物として登場している。彼が水原に定着することになったのは、日露戦争に従軍して以来、満州守備、朝鮮守備を経て、最終的にこの街の守備隊の特務曹長として勤めたのがきっかけであった。ちょうどその水原守備隊の時、郷里に残した妻の糸江から

長女が産まれ、一家三人の家長になった彼は退役後の生活に思い悩んだすえ、この街での定着を決心したのである。

親子三人になつた一家を何処に建設するかについて思ひ悩んだ。満州朝鮮と守備して廻つてゐるうちに、猫の額のやうな土地を守つてゐる兄達の許へ帰る気もせず、小学校を出ると飛び出して、内海を渡つて、大阪で新聞配達や電話の交換手をやりながら通つた数理儀塾の五六年も、大阪に足場を得るほどのものはなかつた。五男に生れた吾助には、もう故郷は無いのも同然であつた。

このように、吹矢吾助が退役して定着できる場所は、日本にはどこもいなかつたのである。故郷の田舎はほとんど食いつめている状態で、大阪にも彼の居場所はなく、また、妻の実家に帰るとしても「はかばかしい職が待つてゐると云ふ風でもない」ので、この街での定着を決心し、日本から妻子を呼びよせたのである。湯浅克衛の多くの作品には、食いつめてから朝鮮に渡るケースが多く見られるが、彼はその逆の立場で朝鮮での定着を余儀なくされたのである。つまり、食いつめられている日本に帰る場所を失っている人物である。しかし、故郷から離れて、朝鮮で「ポロリとした」仕事を見つけ「一旗あげやう」と思った点では、他の作品の登場人物とさほど変わりが無いといえる。取りあえず、吹矢吾助はこのよな事情で水原の街に定着し、商工会議所の会頭や青年団長の役職につくなどの、この街での安定的な生活を得ることができが、このよな安定が得られた朝鮮の水原という街も、あくまでもひとつの異郷にすぎない。そして、なによりも彼を苦しめるのが望郷の念である。彼だけではなく、ほとんどの登場人物が激しい望郷の想いに駆られるが、なかでもだれより激しかったのが、妻の糸江だつた。糸江は故郷から夫に呼ばれて長女の弓子を連れてこの街に来たが、しばらくの間、新しい環境と商売に全く馴染めない。一人部屋に閉じ込めり琴を広げて「小督の悲曲」を弾きながら、「ね、三千円溜つたら、帰りませうよ。来年は溜るかしたら、さ来年には溜るかしたら」などと「しきりに故郷の城下町に帰りたがつていたのである。そして、その望郷の念はいよいよ募り、

糸江は外に出て鮮童などと遊ぶのを嫌つて、弓子をひときも離さず、故郷の思ひ出を話して聞かせるのである。荒い感触で来る街の空気になじめず、温泉の中に引籠つては、よく熱を出して寝込んだ。ああ、あの、口に含んでもつやうな一と彼女一流の形容詞で、甘い大きな房の伊予柑を懐かしんだ。伊予柑が海添ひに赤々と実つてゐる、城の町では、頬をたたくと、ばいんばいんとはねかへる竹輪が出来る。

というように、ほとんど空想と病気の域まで達したのである。しかし、それが鮮子の誕生をきっかけにして大きく変わっていく。いつも部屋に閉じ込もっていた彼女が琴を捨てて積極的に働きはじめたのである。二女の鮮子という名前は朝鮮で生まれたので付けた名前である。つまり、植民者二世の誕生である。鮮子は父母とは違って異郷の朝鮮を故郷にして生まれたのである。鮮子の誕生をきっかけに糸子が「大きく変貌」したのは、朝鮮を故郷にした娘の誕生によって、自分の郷愁心を代理的になかたちではあるが満足させることができ、また朝鮮を故郷にする鮮子への愛情もあり、糸江自身の朝鮮認識が変化したからであろう。しかし、糸子はまもなく事故と仕事の無理がたたり倒れてしまう。そして、死ぬ間際に鮮子を気遣い、「鮮子は強いねえ」という言葉を残して息を引き取る。それを聞いていた吹矢吾助は、鮮子に対する「糸江の憧憬」に気づく。その憧憬というのは、糸江自身にはなかなか馴染めなかった異郷の街を、鮮子は強く根を下ろして育てていたことであろう。吹矢吾助は糸江の死に際でこういう二人の対照的な姿に改めて気付くのである。

移し植ゑられた木の中でも、糸江は余りに繊細い美しくさだつた。この土地の土壌からぬつと生え出した、鮮子のやうな木は、逞ましい根を張り廻らして行くだらう

新しい土地に移住した一世が根本的な脆弱さを持っているのに対し、その地で生まれた二世は、「逞ましい根を張り廻らし」ながら成長していくことが予告されている。そして、新しい世代の逞しさに比べ、一世たちが持つ根本的な脆弱さは、彼らの個々が持っている強い望郷の念である。彼らのこういう望郷心をよく現しているのが、内地に別荘を建てる計画である。内地に別荘建築地を手に入れた時には、吹矢吾助をはじめ会のみなは大いに喜ぶが、その喜びのなかから自分たちの望郷心の強さをあらためて確認する。それを弁護士倉谷は、「魅力といふよりは、どうも心魂に徹した憧憬」だと指摘するが、そのような望郷が高じて、朝鮮育ちの娘の結婚にも影響する。男はみな内地の嫁をほしがり、朝鮮育ちの娘が汜濫していたのである。これを当番幹事の前田は、「郷愁だよ。さつきの、例の、郷愁だ、内地のものなら、あばたまえくぼ」と皮肉って、「内地に別荘を作る心理だ。まかり間違つて食ひ上げたら、内地の縁つづきが足場になるといふ」と、鋭く一世たちの持つ根本的な脆弱さと矛盾について指摘する。この前田の話は、作品のなかで進められている鮮子と因幡の息子与市の結婚の話と関係している。朝鮮生まれの二人は、幼い時から父母によって将来結婚することを約束され

た間柄で、吹矢吾助はいよいよ二人の結婚を考えたが、それより先に、因幡屋は与市を内地に送り、内地から嫁を連れてこさせ結婚させてしまう。この因幡屋の態度に憤慨した吹矢吾助は披露宴の演説の時に感情を爆発させ、場を白けさせてしまうが、因幡屋が内地から嫁をもらったのは、彼が内地に別荘を持つことと同じような望郷の念からであったことに気づかされる。それで、事件後間もなく彼は、「いつこの土地を立去るかもわからない」ので、墓を作ること念頭に置かなかった妻の糸江の骨壺をこの街のどこかに据えておく決心にいたる。

このように、「望郷」の登場人物たちのほとんどは朝鮮の水原で安定することができたが、絶え間無い郷愁の念に苛まれる。それが、内地に別荘を建てさせ、内地の嫁を求めさせるのである。内地から「ポカリとした」仕事を見つけてこの街に定着することになった彼らにとっては、この街も真の意味での故郷ではなく、生活の安定が保障されるあくまでも異郷にすぎなかったのである。しかし、このような一世とは違って、新しい世代として遅しく成長していくのが、朝鮮生まれの鮮子に代表される二世たちである。彼らは内地に故郷を持つ親たちとは違って、最初からこの街を故郷にして生まれているのである。当然、親たちのような内地に対する望郷の念はなく、そのため、鮮子たちはこの街に遅しく根を下ろしていくことになる。今までの水原は、日本人からの移住民をを安定させる大きな母胎として働いてきたが、それはあくまでも異郷という一時的な母胎に過ぎなく、それが鮮子のような二世の誕生によって故郷という真の意味での大きな母胎に転じていくのである。その二世たちが故郷としての水原を再発見していく過程を描いたのが「葉山桃子」である。

「葉山桃子」は、一九三九年五月、同名の作品集『葉山桃子』に収録された作品である。主人公の繁太が、夏休みで東京の学校から帰省して、この街で目撃することになる新たな変化を描いたものである。そして、その変化のおもな部分が昔の級友たちの故郷に対する認識である。まず、繁太は帰省した街の市場で、大阪から帰って、薬缶のたたき売りしている級友の松本に出会うが、彼から葉山桃子も街の市場で水蜜桃を売っていることを知らされる。松本は小学校の時餓鬼大将で、葉山桃子とよからぬ事件を起こして退学させられ、以来大阪で土方や博労などの職を転々したすえ、故郷の水原の街にもどり、朝鮮人相手の金物屋を開いていたのである。その松本から葉山桃子の居場所を知らされた繁太は、市場を移動しながら、この作品の表題になっている葉山桃子にまつわる小学校時代の思い出に浸る。

繁太は四国の海辺に生まれ、「五つ六つ頃父に連れられ」て水原の街に移住して以来、街の小学校に通わされ、そこで同じ移民二世の級友と付き合うことになる。母が果樹園を経営する葉山桃子、東拓移民二世で餓鬼大将の松本、禪宗系の

お寺の息子小野、北海道から転校し、父親が李王職牧場の管理者と高等農林学校の教授を兼ねている的場まき子などがそれである。親たちの多様な職業は、さまざまな理由で植民地に移住してきた日本人社会の構成をよく示しているが、このような植民地二世たちが机を並べている水原小学校の六年次の時、北海道から転校してきた的場まき子によって、ひとつの事件が引き起こされる。転校して間もなくの綴方の時間に、彼女が「札幌に帰りたい」という題で、「ああ、札幌に帰りたい。こんな汚くない朝鮮は、いやいや」と発表したからである。的場まき子の作文は植民地の田舎町の教室に大きな衝撃を与え、その悲しさに耐えかねた葉山桃子が、抗弁しながら泣きだしてしまう。

ちやうせんは・・・

ちやうせんは、きたなくはない。

ちやうせんは汚くはない。

再び繁太はわけのわからない感動に襲はれて、臉が熱くなった。教場の空気も揺れ始めた。女生徒の中には鼻を吸る者が出た。

この葉山桃子の抗弁こそ、今までとは違う新しい世代の誕生を示すものといえる。朝鮮を自分たちの故郷と思い、それに対する愛情をもつ世代の出現である。その点、湯浅克衛文学のなかでも大きな転換点になるきわめて重要な作品といえる。一方、この事件以降、ますます暴力的になる松本を抑えるために、小野が中心になり「若葉会」を結成し、「朝鮮人の子供をいぢめないこと」などの会規を作るが、効果なく会は解散する。そして、二期期になり松本は葉山桃子のよからぬことで退学処分になり大阪を転々とする。卒業した葉山桃子は母の農場を引き継ぎ、的場まき子は女子大に、繁太は「内地へのおこがれ」から東京の上級学校に進学することになる。それぞれが別れ、故郷を離れていったのである。

そして、しばらく後、繁太は東京での生活のなかで、今まで追ってきた内地という「親達の故郷」ではなく、朝鮮という「自分の故郷」に対する認識に目覚める。それで、急いで故郷の街に帰ってみると、昔の級友たちもみな故郷にもどり、それぞれ一人前になって、「もう移民ではなく、その土地生え抜きの百姓」として、働いていたのである。松本は金物屋として故郷に戻り、「朝鮮は汚くていやです」と作文に書いた的場まき子も故郷の街で、鉾山の発掘調査に携わっていたのである。繁太が「改めて故郷を見直さう」として帰ってきた時に、他の級友たちも時代「一つの潮」になって、「陸統と帰つて来て、自分の故郷の再発見」に向っていたのである。この級友たちの帰郷を促した「一つの潮」というのは、宇垣総督下で実施された心田開発運動と農村振興運動であろう。しかし、それはと

もかく、故郷を離れた二世たちが新しく自分たちの故郷を再発見し、定着していくことによって、水原という街は異郷から故郷へと転じていくのである。今までは異郷として日本人を安定させる仮の母胎であった水原が、二世の誕生と成長によって、故郷としての真の母胎に変わっていくのである。そして、その故郷としての真の母胎の誕生こそ、朝鮮においての植民の完成でもあろう。

6 むすび

以上、考察したように、湯浅克衛の文学は水原という植民地の街と密接な関わりを持ち、水原はこの地に移住してきた日本人を守り、安定させる役割をしている。城郭に囲まれたこの街が、日本を食い詰め、「ポカリとした」仕事を見つけてこの街にきた移住民たちを安定させる、まさに母胎のような役割をしているのである。このような傾向は湯浅克衛文学の出發になる「カンナニ」と「焔の記録」から始まり、それ以降も続いているといえる。

「カンナニ」では、カンナニと龍二との親密な関係が水原という街を背景にして深まり、それが万歳事件でカンナニが殺されることによって破綻してしまうが、そのカンナニの死には、水原の街が持つそれぞれの違う土台が大きく関係している。日本人の龍二一家は水原に移住してますます安定し、水原在住のカンナニ一家は日本人によって次第に窮地に追い込まれるという構造である。このような街の構造を反映するかのように、カンナニは殺され、龍二一人が取り残されるのである。水原という街は、龍二という日本人の母胎で、朝鮮人のカンナニの母胎ではなかったのである。そのような構造は「焔の記録」になると、より明確になる。「焔の記録」での義母と縫子は、日本を追われて朝鮮を転々と渡り歩くが、朝鮮のどこにも安定できず、やっと水原に至り「ポロリとした」ことを見つけ、一夜にして大金持ちになる。また、縫子も夢を抱いて東京に出奔するが、散々破れるかたちで帰郷を余儀なくされる。そして、水原に戻り、死んだ母の燃え上がる焔を前にして再生への勇気を得るのである。水原が母と重なる母胎になり、彼女を癒してくれるのである。それが長編小説「城門の街」になると、神社を中心とする日本人の空間が水原全体に広がり、この街が日本人全体の大きな母胎になっている。今までの日本人個々の母胎から、日本人全体を守ってくれる大きな母胎として拡大されていくのである。しかし、いくら母胎といっても、水原という街は、この地に移り住んだ日本人にはあくまでも一つの異郷にすぎない。そこで当然起こるのが望郷の念である。「望郷」はこういう一世たちが持っている内地への憧憬を描いたもので、彼らは水原でいちおうの安定は得ているが、いつか「食ひ上げたら」帰ることのできる内地について強い郷愁心を見せている。水原はあくま

でも生活の安定を得る仮の母胎であって、故郷としての真の母胎ではないからである。しかし、水原育ちの二世の場合になると事情は違ってくる。彼らは最初からこの街を故郷にしているからである。そういう故郷としての水原を描いたのが「葉山桃子」である。この作に至り水原は今までの異郷から故郷に転じていくのである。一時水原を離れた級友たちが続々と故郷にもどり、自分たちの故郷を再発見することで、水原という街は真の意味での故郷としての日本人の大きな母胎になっていくのである。そして、その故郷としての真の母胎の誕生こそ、朝鮮においての植民の完成でもあろう。

注

(1) 酒井政之助『発展せる水原』（酒井政之助、一九一四年）。この本には数多くの写真と統計資料や広告などが載っていて、当時の水原の面影を詳しく見ることができる。

(2) 酒井政之助『水原』（酒井出版部、一九二三年）。湯浅克衛の父親湯浅伊平の経歴を全文引用する。

・湯浅伊平氏・物産商会主、氏は明治十四年八月徳島県川島町に生れ同三十三年元大阪府立数理義塾中学を卒業し後身を軍籍に投じ特務曹長に昇進退役後大正元年三月渡鮮以来商業に従事し今日に至る氏は一面選はれて水原実業協会の常務員其他の要職に当選水原の進展に努力中である。

湯浅克衛の自伝的な作品には、巡査の職についている父親の像がよく紹介されているが、この年譜を見るかぎり、その経歴は見当たらない。また、梁礼善の湯浅克衛年譜（池田浩士編『カンナニ』所収）には、守備隊の退役時期が一九一六になっているが、それとも一致しない。ついでに著者の酒井政之助の経歴を紹介する。

・酒井政之助（著者）訴訟代理業、朝鮮新聞水原支局長、水原学校組合会議員、水原実業協会法律顧問、水原電気株式会社監査役、新潟県人会長、水原読書会主事、等の現職にあり、著者は明治十八年八月新潟県直江津町に生れ、同四十一年六月中央大学を卒業、同四十三年九月渡鮮現業に従事。

(3) 『文学評論』（一九三五年）の「カンナニ」と戦後の創作集「カンナニ」（一九四六年、講談社刊）との異同については、任展懋「植民者二世の文学―湯浅克衛への疑問」に詳しい。一方、高崎隆治は「日本文学者のとらえた朝鮮」（『季刊三千里』、一九八〇・春）で、戦前と戦後の「カンナニ」が「同じものであると言い切ることはできない」としながら、戦後の「カン

ナニ」は「作者の創作性のきわめて強い作品」であると指摘している。しかし、本論では、いくつかの細かい単語の異同から湯浅文学の国策的な面を論じるものではないため、二つの「カンナニ」がその内容においてはほぼ同様のものではなかったとみなす。

(4) 『文学評論』の「カンナニ」の付記には、「この後半は「万歳事件」が扱はれてゐる」という徳永直の「附記」がついている。

(5) 堤岩里虐殺事件は、一九一九年四月十五日、当時の水原郡郷南面堤岩里で起こった独立運動弾圧事件で、水原を中心としたこの地域の独立運動鎮圧のために差し向けられた日本軍が、訓示をすると称して同里内の住民を教会の礼拝堂に閉じこめ射殺、建物もろとも焼き払った。死者はキリスト教徒、天道教合わせて二九名であった。一方、柳寛順とは当時梨花学堂在学中の女学生で、万歳運動の際、故郷の天安郡の独立運動を組織して指揮をとったが、憲兵の発砲で負傷し逮捕され、後、獄中闘争を続けたが、病氣と拷問により十六才で獄死した独立運動家である。その壮烈な祖国愛で「朝鮮のジャンヌ・ダルク」と呼ばれている。以上、大村益夫外『朝鮮を知る事典』（平凡社、一九八六年）を参照。

(6) 山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』（岩波新書、一九七一年）を参照。

(7) 注(1)に同じ。

(8) 『水原市史』（水原市史編纂委員会、水原市、一九八六年）

(9) 注(1)に同じ。

(10) 任展慧「植民者二世の文学―湯浅克衛への疑問」（『季刊三千里』、一九七六年、春）

(11) 池田浩士「解説・湯浅克衛の朝鮮と日本」『湯浅克衛植民地小説集カンナニ』（池田浩士編、ハ株Vイザラ書房、一九九五年三月）所収。しかし、湯浅克衛本人は、戦後の講談社版「カンナニ」の「作品解説と思ひ出」の「著者あとがき」の中で、「昭和十年が、「カンナニ」「焔の記録」のやうな作品が発表し得る最後の年だったやうである」と言い、この二作が同一系列の作品であるという見解を示している。作者の見解から見るかぎり、「焔の記録」が転向小説として書かれたとは言えない。

(12) 東洋拓殖株式会社『東洋拓殖株式会社三十年史』（一九三九年）

(13) 東洋拓殖株式会社『植民統計第一報』（一九一一年）から第一回移民の移住地についての記述を見ると、

「第一回移民ヲ収容シタル土地ハ慶尚南道（馬山府、固城、酒川郡）慶尚南道（大邱府）全羅南道（羅州郡）全羅北道（井邑、古阜、金堤、金溝、泰仁郡）忠清南道（石城、連山郡）及京畿道（京城府、水原郡）ノ六道三府十

一郡ニシテ、即ち京城、水原、大邱、馬山ノ各鉄道沿線ノ主要ナル都会付近、
梁山江ノ沿岸、東津江ノ流域、江景平野及比慶尚南道ノ南海岸方面ナルガ、
孰レモ土地比較的肥沃ニシテ、交通モ亦極テ便利ナル地方ヲ選定セリ。」

(14) 移民は次の二種類によつて分けられた。注(12)と同じ。

第一種移住民(甲種)

田畑二町歩内外ヲ割当テ全部自作セシムルモノニシテ土地代金ニ対シ五年据
置キ年利六分二十五年以内ノ年賦ノ方法ニヨリ償還ヲ為サシム

第二種移住民(乙種)

田畑五町歩内外ヲ割当テ其ノ一町歩内外ヲ自作セシメ其他ハ小作ニ附セシム
ルモノニシテ土地引渡ノ際其ノ四分ノ一以上ヲ一時ニ払込マシメ残額ニ対シ
テ八年利七分二十五年以内ノ年賦ノ方法ニヨリ償還ヲ為サシム

(15) 清津商工会議所編『清津と後方商勢圏及付録』(一九三四年)の「昭和
八年中に於ける月別氣象調査表」を参照。

(16) 注(15)と同じ。同書の「昭和八年中に於ける月別天氣日数調査表」
によると、清津での霧は、四月が十日、五月が十二日、六月が十五日、七月
が十七日、八月が五日で、それ以外の月には発生していない。

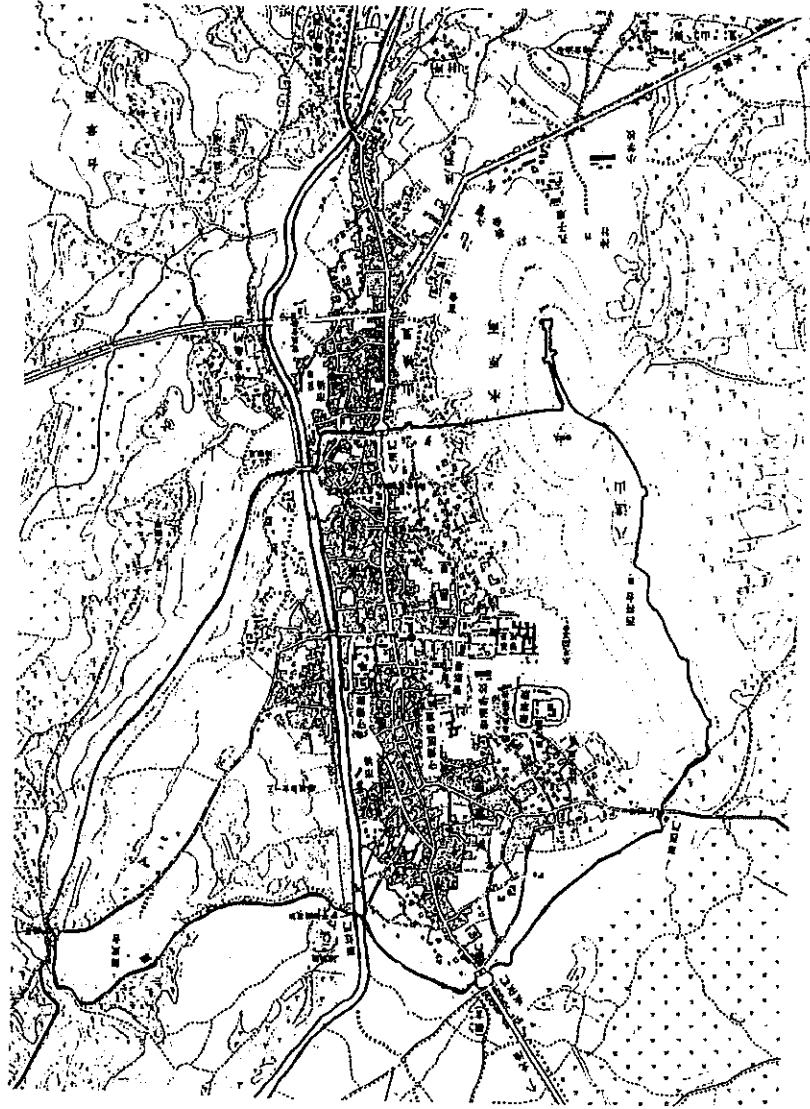
(17) この点については、池田浩士「解題・註」(池田浩士編『カンナニ』所
収)にも指摘されている。

(18) 注(10)と同じ。

(19) 注(11)と同じ。

(20) 注(11)と同じ。

(21) 注(2)と同じ。



・参考資料（水原地図、一九一七年、一万分の一）

第2節 湯浅克衛文学と朝鮮総督府の心田開発

1 はじめに

湯浅克衛の作品の中には、「心田開発」という多少馴染みの薄い題目の作品が二つある。一九三六年六月『文学評論』発表の「心田開発―朝鮮新風景」（以下、「朝鮮新風景」と略する）と一九三七年十月『自由』に発表した「心田開発」がそれである。この二作は、ほぼ同様の内容をそれぞれエッセイと小説風に仕立てたもので、同一人物がさまざまな作品に反復登場するもう一つの特徴とともに、湯浅文学がもつ根本的な狭さとしても指摘できる(一)。しかし、それには自己体験による時代の充実した描写を本領とする湯浅文学としては避けられないところでもあるだろう。心田開発を題目にしたこの二作も、そのような充実した時代描写への必然性から生まれたもののように思われる。

湯浅克衛が作家として日本文壇に登場した一九三五年の初頭、朝鮮総督宇垣一成は、農村振興十箇年計画と心田開発という二大方針を打ち出した。前者は宇垣総督赴任以来、疲弊した農村の「自力更生」を目的とする農村振興運動の一環で実施されたものであり、後者はその農村振興運動を支える一つの精神運動として、この年から盛んに叫ばれたものである。そして、湯浅克衛文学には、このような宇垣総督時代の朝鮮の政治社会的な変動がさまざまなかたちで織り込まれている。その社会変動の中心的な軸が農村振興運動と心田開発で、それをもっとも具体的に描いたのが上述した「心田開発」二作である。

以下、湯浅克衛文学に現れた宇垣総督時代の心田開発について、「心田開発」二作を中心に、他の作品との関連の上で考察する(2)。

2 心田開発

心田開発は一九三五年の初頭、宗教復興による心地開発を目的として、農村振興十箇年計画とともに宇垣総督施政の二大方針として打ち出され、同年一月十六日から三日間、総督府第一会議室で開かれた道参与官会議の打ち合わせの席上で宇垣総督の訓示「参与官会議に於ける指示」によって本格的に始められた運動である。その訓示では、朝鮮では往時の盛んだった宗教が漸次衰退し、今日には「各種の蒙昧なる迷信の台頭」と西洋からの個人主義によりその弊害が甚だしいと指摘した後、

更にこの際一般民衆をして健全なる信仰を喚起し之を培養し、動もすれば乾燥

無味に陥り、或は荒み勝にならんとする民衆の心田に潤ひを加へ、喜んで業を励み、生を励み、所謂物心両面より、安心立命の境地に到達せしめんことを望んで已まざるものである、(後略)(3)

などというように、朝鮮民衆の信仰心を喚起培養することにより、「民衆の心田」に潤いを与え、「物心両面」より「各人が確平たる人生観を抱持し、敬虔なる精神生活に入るやう」指導するものであった。この「物心両面」という言葉からわかるように、この運動は当時積極的に進められていた農村振興運動の精神的な面を補う側面で、民衆の信仰心を啓発するというものであった。この宇垣総督の訓示に一番先に同調し、すばやく動いたのは各宗教団体であった。同年一月三十一日の仏教懇談会、二月二日の神道懇談会、二月六日の固有信仰懇談会、二月九日には基督教懇談会がそれぞれ開かれ、その具体的な方策に奔走したのである。宇垣総督の訓示は、同年四月三十日の全鮮農村漁村振興関係官大会同の席上でも繰り返されているが(4)、訓示の内容と各宗教団体のすばやい対応から見ると、初期はやや宗教色の強い精神運動であったといえる。「心田」という言葉自体も仏教色の強いことばである。その点、宇垣総督自身が篤実な日蓮宗の信者であったことと無関係ではないと思われる(5)。

しかし、やや宗教的な色彩で続いたこの新しい精神運動が、一年くらいの試行錯誤を経て、翌年心田開発委員会の発足する際には大きく様変わりする。宗教色が薄くなり、天皇を頂点とする国家主義思想に変わるのである。心田開発委員会は、一九三六年一月十五日、総督府主催で宇垣総督臨席の下、京城府民館で発足し、ここで初めて心田開発の具体的な要綱と目標が協議決定されたが、その要綱においては以前の宇垣総督の訓示や演説をそのまま引き継ぐものであったが、その目標となると、

- (一) 国体観念を明徴にすること
- (二) 敬神崇祖の思想及信仰心を涵養すること
- (三) 報恩、感謝、自立の精神を養成すること

というように、国家主義的な色彩を強くあらわす(6)。以前の宗教心や信仰心という言葉自体も、目標の(二)からわかるように、国家主義と天皇主義に収斂する言葉として意味が変質されたのである。心田開発の発表当初、訳もわからずに同調して懇談会などを開いていた基督教や固有信仰などは、結果的にこの制度とは本質的に合わなくなり、その後、自然と排除されてしまう。国家神道だけが一番活発に活躍することになるが、しかし、全体としては、この時期の心田開発運動

というのはあまり明確なかたちが見えなく、各人各色でやたらに混乱している感がある。心田開発委員会発足からまもなくの三月には、総督府の機関雑誌「朝鮮」が「心田開発特集号」を出しているが、そこでもこの運動の範囲や対象についての具体性が見えず、「なんでもあり」という状況である(一)。それもそのはずで、心田開発の三つの目標のうち、(一)と(二)は、それぞれ「万世一系」の天皇主義と伊勢神宮を中心とする天皇の祖先崇拜を指しており、また(三)の「報恩、感謝」も国家思想を高揚するものなので、精神運動としての具体性と内容があまりもないからである。唯一意味をなしている「自立」という言葉だけが、やっと本来の目的になる農村振興運動の精神を表しているくらいである。このように、宇垣総督時代の心田開発は、その目標からしてさまざまな形で解釈され、混乱してはいたが、その本来の実質的な目的は、宇垣総督時代の看板事業として進められた農村漁村振興運動を支える精神運動としての意味が大きかったといえる。つまり、農村漁村の「自力更生」を目指す新しい精神運動としての一面があったのである。この農村振興運動と心田開発運動の内容と関係は、強いて例えれば、一九七〇年代の韓国で強力に推進されたセマウル運動(新しい村運動)とセマウル精神(新しい村精神)との関係に非常に類似したものがある。しかし、ここで見逃してはならないのは、心田開発運動には、その三大目標から見ると、精神運動のなかに時代的な特徴としての皇国臣民思想による国家主義が強く付着し、また現にそのような方向を目指したことである。それが顕著に現れたのが宇垣総督の後任である南次郎総督の時代であった(8)。南総督は赴任当初から「内鮮一体」を掲げながら強力な「皇国臣民化」を進めることになる。日中戦争や太平洋戦争が差し迫り、戦時体制が強まるなかで、朝鮮も農村振興運動どころではなくなったのである。そのため、農村振興運動を支える精神運動として出発した心田開発運動はさらにその本来の意味を全く失い、そこに付着していた国家主義の思想だけが強化されるかたちで、南総督時代の政治スローガンである「内鮮一体」と「皇国臣民化」の思想的な土台になっていくのである。

以上、心田開発について述べたが、湯浅克衛が日本の文壇に登場した一九三五年の朝鮮は、以前の農村振興運動が継続されているなかで、まさにこの心田開発が唱えはじめられた時期であった。そして、彼が長年の東京滞在の後、一時帰郷することになる一九三六年四月は、心田開発委員会が発足され、その特集が『朝鮮』に組まれるなど、この運動が一番盛んに宣伝された時期である。このような時代的なこともあり、湯浅克衛文学には、宇垣総督時代の諸政策とともに心田開発がさまざまなかたちで盛り込まれることになる。

湯浅克衛は一九三六年四月に朝鮮の水原に帰省し、まもなくの四月十二日まで、同年六月『文学評論』に発表する「朝鮮新風景」を完成している(8)。湯浅克衛の正確な帰省日は確認できないが、四月に帰省して、四月十二日までに完成したことは、まさに一気に書き上げたということになる。東京での長い生活のすえ、久しぶりに朝鮮に帰ってきた作者が、到着早々一気に書き上げたというのは、その内容になっている心田開発に対する相当の刺激と衝撃があったことを窺わせる。彼が朝鮮を留守にしている間、宇垣総督の心田開発運動が強烈に展開されていた朝鮮の新しい雰囲気は、大きな驚きであったに違いない。そして、作品の冒頭には、作者自身による心田開発についての記述がある。

心田開発―とは字の示す通り心の田の開発だ。新しい朝鮮を見直すためにこちらに来た僕は、宇垣総督の施政方針である朝鮮工業化、農村振興運動の特徴的な現れである、南綿北羊政策だの、産金奨励だの、大規模な電化政策だのと一緒に思想改変のための一種の教化運動である、心田開発の状態を見ることを楽しみにしてやつて来た。心田開発とはいかにも朝鮮らしい語呂を持った、微笑ましい呼び名ではないか。

しかし、彼が東京にいる間、こういう朝鮮の変化を全く知らなかったのではない。作品中からも見みられるように、彼は「新しい朝鮮を見直すため」に、「心田開発の状況を見ることを楽しみ」にして帰郷しているからである。そして、このような新しい朝鮮の変化を彼に伝え、帰省を促したのが、一九三五年『文学評論』に発表された小品「元山の夏」での友人の手紙であろう。そこでの友人は作者の分身の△私△に、「お前の知つてゐる朝鮮はもう古いぞ、朝鮮はほとんど変つてゐる。何としてでも早く帰つて北鮮から国境、北満州を廻らうぢやないか」と勧めている。彼は「元山の夏」の友人の勧めどおりに帰郷し、朝鮮の新しい変化を心田開発を通して目撃することになったのである。先述したように、心田開発運動はあくまでも宇垣総督時代の精神運動である。そして、この精神運動を要求する大きな時代的背景になっているのが、宇垣総督時代の農村振興運動を始めとするさまざまな政策であった。作品中にも紹介されている「朝鮮工業化」、「南綿北羊政策」、「産金奨励」、「大規模な電化政策」などの政策がそれであるが、こういう諸政策による朝鮮の変化こそ「新しい朝鮮」の表面的な原動力だったのである。とすれば、その「新しい朝鮮」の具体的な姿は一体どのようなものであったらうか。

一九二〇年代の半ば頃までの朝鮮経済は、産米増殖計画の下で米作を中心とす

る。いわば典型的な植民地型の経済システムで、工業らしいものはほとんどなかった(10)。朝鮮にはもともと工場法がなく、一九二〇年には会社令まで撤廃され、日本の資本が有利な条件で自由に入ることができたが、道路や電気などの産業基盤が十分に設備されておらず、また大陸に近い危険性もあって、日本の本格的な工業資本の投入はあまり行われなかった。このような状況のなかで、化学工業を主力とする野口財閥が朝鮮の豊かな水力資源と安い労働力に目をつけて、一九二六年、赴戦江の電力開発を目的とする朝鮮水電株式会社を設立し、翌二七年には朝鮮窒素肥料株式会社を創立する。その後、同財閥は一九二九年、赴戦江発電所の送電を開始し、翌三〇年には朝鮮窒素肥料興南工場の操業を開始する。この野口財閥の資本投入によって、三井、三菱などの財閥企業からも本格的な投資が始まり、朝鮮は以前には見られない活気に溢れることになる。とくに野口財閥の拠点である興南の場合は、北鮮の一漁村から人口十万人の工業都市に変貌するまでに至る。さらに、野口財閥は一九三三年には長津江水電株式会社を設立し、本文中でいう「大規模な電化政策」を実現していく。「朝鮮新風景」の友人が「僕」を「北鮮」廻りに誘ったのは、北鮮でのこのような変化を見せたかったからであろう。

ちょうどこのような変化の時期と相俟って、一九三一年の六月には宇垣総督が赴任し、八月には満州事変が勃発する。満州事変の影響により、朝鮮は兵站基地としての役割が増し、以前の農業本位から鉱工業中心への経済再編に拍車がかかる。満州事変以降、国際連盟からの経済封鎖により綿花の輸入が困難となり、日本の輸出の主力である紡績産業が瀕死の危機に立たされたことで、南綿北羊政策が押し進められる。また、事変後の世界的な金本位制の停止から金価格が騰貴したことで朝鮮総督府によって産金奨励政策が実施されることになり、それが他の鉱物資源の開発を促す要因にもなっていく。このような新しい政策は、事変後の国内外の情勢の変化のなかで押し進められることになるが、こういう宇垣総督の特徴的な政策のすべてを総轄するのが農村振興運動(漁村まで含めて農村漁村振興運動とも呼ばれた)であった。

農村漁村振興運動は、旧来の政策により疲弊した農村を再建する目的と、満州事変という「内外ノ非常時局ニ際会シ速ニ根本的ニ振興対策ヲ確立遂行スルニ必要」に迫られて(二)、宇垣総督赴任当初から計画され、積極的に押し進められた政策である。人口のほとんどが農業に従事し、その八割近くが小作人である朝鮮農民は、借金と食料の自給自足に悩み、春の「春窮期」となると草根皮木で延命するありさまだったのである。しかも、その農地の大部分は「天水沓」といって雨に依存した農業しかできず、干ばつになると事態はさらに深刻になり、朝鮮農民は「精神的ニモ経済的ニモ漸次頹廢自暴自棄」に陥って、社会不安の一因にも

なり兼ねないところがあったのである(12)。農村漁村振興運動は、このように破壊した農村経済を再建する目的で、「春窮退治、借金退治、借金予防」を運動の中心目標に設定し、一九三二年夏に開催された道知事会議のなかで決定され、(13)翌年三月の通牒「農家経済更生計画樹立ニ関スル件」によって具体化された。以降、「農家更生五年計画」「農村振興十箇年計画」として実施されていくことになるが、この農村振興運動は、農村を立て直すという経済的な側面ばかりではなく、その二本柱として、精神主義的な側面が強く強調されていた。その精神的な面の強調が後に心田開発という別個の運動として展開されていくが、後にこの運動が行き詰まるに従い、その精神的な面ばかりがやたらに強調され、たとえば、一九三七年になると「一般民衆ノ勤勞精神ノ振作・生活ノ改善・消費節約・國旗掲揚・色服着用・隣保協助等汎ク美風良俗ヲ馴致シ農産物ノ増収・副業の実行等効果亦見ルベキモノアリ」といったように、本来の目的が主客転倒のかたちになってしまう(14)。この転倒した結果が示すように、農村振興運動は当初の目的から見て成功した政策とは言いがたい。しかし、それはどうであれ、湯浅克衛が何年かぶりに朝鮮に帰郷した一九三五年の四月は、この農村振興運動に総称される宇垣総督のさまざまな政策により朝鮮全土が激しく変化していた時期である。こういう変化が「元山の夏」の友人の勧め、また、「朝鮮新風景」の「僕」が見直すうとする「新しい朝鮮」だったのである。とすれば、この「新しい朝鮮」の姿が作者自身でもある「僕」の目にはどのように映ったのであろうか。それを本文の筋の展開からたどってみよう。

「朝鮮新風景」の「僕」が、この街に来て一番驚いたのは堂々たる普通学校の新築である。少年時代の記憶では、バラックのような小さな木造の建物であったが、それが二階建ての赤煉瓦の瀟洒な姿に変わり、学級数も相当増えていたのである。これは私立学校も同じで、友人の和尚が経営している高野山国民学堂の場合、昔は三、四十人の単級であったが、いまは全体が三百人近くに膨れ上がり、小さな教室に八〇人以上がひしめいていたのである。この混雑ではまともな授業ができるはずもなく、それを教師は「いいのか、悪いのか、これも心田開発のお蔭ですばい」とつぶやく。しかし、教育の変化は量的な膨張だけではなく、その内容においても大きく変化していた。昔の普通教育は、ただ同然の授業料で、しかも貧民児童を対象にしたが、いまは「手に金指環をはめたやうな母親達の子弟ばかり」を集めて、授業料と会費も取り立てていたのである。新しい教育政策により、各地に出来ている大工場が大概普通学校卒業を就職条件にしているため、普通学校が混雑してきたのである。それについて「僕」はいささか疑問を示し、

労働者に何故そんな就学の条件が必要なのであらう、早く近代的な生産方法を

飲み込ませるためか」と云へば、それだけではないのだ。普通学校は大体に於て成功したらしく、日本国民としての訓練を経て来てゐるとみなせることになるのである。

というふうには、この普通学校の拡大が「日本国民としての訓練」を本来の目的にしていることに気づき、それを宇垣総督の講演集『伸び行く朝鮮』のなかから確認する。

宇垣総督の講演集「伸び行く朝鮮」を読むと、以後実業的のもの以外の中等は許可しない方針である。教育即生活、生活即勤勞でなければならぬ。「頭と口とのみ働きて、腹と腕のなき様な人物を造らざる様に、寧ろ頭と口は少々劣りても腹の据つたしつかりした、薄篋でない、分の厚い、輪郭の多きな、ゆとりのある……」と言ふ人物の養成を目指してゐる。

本文の『伸び行く朝鮮』から引用された宇垣総督の演説文は、一九三三年九月二九日、京城師範学校で開かれた全国師範学校校長会でなされた宇垣総督の「朝鮮最近の面影」という講演の要旨で、宇垣総督の教育方針の本質的な部分である。宇垣総督の教育の方針は、勤勞教育と精神教育を二本柱とするもので、その具体的な政策として現れたのが実業教育の重視と普通学校の拡大であった(二〇)。実業教育の重視は、初等中等学校における職業科の設置、教科書の改編、実業学校以外の中学校の設置制限という方針で具体化された。普通学校の拡大は、一九二九年以来の一面一学校計画の遂行と簡易学校の設置を促進させることであったが、こういう普通学校普及政策の大きな目的の一つが、「朝鮮新風景」の「僕」が指摘したように、「日本国民としての訓練」であった。しかし、普通学校の拡大は、総督府により強力に推進されたにも関わらず、一九三五年の成果によると「尚萎靡不振の域を脱せず」、その就学歩合になると、「今日尚推定学齡児童に対し既に二割弱の低位にある」という状況だったのである(二一)。その成果が上がらない根本的な理由は、農村経済の貧弱によるものであり、そのような事情が「朝鮮新風景」のなかでも細かく観察されている。

「僕」は、街の郊外に出かけ、柳で作った笛を吹きながら畦道で遊んでいる二人の鮮童に出会い、さっそく彼らに質問する。

「普通学校は行つてゐるか」

と聞くと、

「行つてないんだ」

と答えた。

「どうして行かない」

すると、見る間に顔を曇らした鮮童が、

「お金がないもんですから……」

それで「僕」は次の部落を通る時も、またその次の部落を通る時も子供に会いさえすれば、「学校に行つてるか」と聞いてみるが、子供達は大概学校に行っていないかった。そして、同じように「お金がない」と答えるのである。街の普通学校は生徒であふれていたが、農村の田舎の児童は貧困のためほとんど学校へ行けない状態だったのである。宇垣総督の主力事業である農村振興運動は、こういう農村の貧困退治をその基本的な目標にして推進された運動であるが、「僕」の観察したかぎり、その状態は実施から何年も経ち、宇垣総督在任の最後の年になるこの時点でもほとんど改善されていなかったということになる。改善どころか、その状況はさらに悪化し、以前は「ただのやうに安かった」私立学校の授業料が、普通学校と同じような授業料と会費を取り立てることで、貧しい農民の児童はますます学校から排除されることになったのである。実際こういう問題を解決するために、総督府は一九三五年「地税の低下を断行して農村負担の軽減を計り、且公立普通学校に於ける初等教育の授業料を低減」したりするが(二)、その実状は翌年のこの作品から見ると、あまり変わっていないのである。また、宇垣総督の看板事業である農村振興運動は農民救済を掲げて強力に進められたにも関わらず、農民の惨状はさらに深刻になっているか、あるいはほとんど改善されてなく、精神運動で出発した心田開発運動は、作品で見ると、学校教育においていびつな結果をもたらしたにすぎなかったのである。さらに、心田開発運動自体は、お寺の山門で発見した立札に対応する若い男女の行動が示すように、ほとんど形骸化されている。美風良俗を守り、勤勉精神を養い、退廃的な遊興を禁止するなどというこの運動の宗旨により、寺院での飲酒、歌舞、宿泊などを禁止したことに対し、若い男女は貯水池の近くに急遽開業した朝鮮料理屋にその遊び場を変えてしまうのである。

このように、街と農村地域での心田開発がもたらした教育的なさまざまな現象を目撃した「僕」は、最終的に教科書においての変化を調べることになる。教科書のなかでも「僕」が注目したのは、「総て昭和十年、丁度昨年改訂」されたばかりの六年生の教科書の歴史と修身であった。最新の動向が最もわかりやすいからであった。

歴史は、一番重点を置いてゐるのは、新羅の王子天日槍が「御徳をおしたい申

して」、鏡や玉や槍などを献上しに播磨国の海岸に上陸したことや、「神功皇后の御母君は日槍の子孫」であることや、以後の朝鮮が全く、内乱と支那の脅威で国として統一がなかつたこと、絶えず我が国の差し延した手に恩恵を得てゐたこと、最後に遂にその時期が来て併合になること、御稜が如何に輝かしく併合に関する御勅語がどんなに立派なものであるか、と云ふことを絶えず、我が国といひ、それに新羅や百済と対比させて書いてあつた。

さらに、修身では、

修身では卷三（だから三年生である）を取つて見ると、第一、師をうやまへの李退溪から、第六には貝原益軒の健康、大江了佐の忍耐、公正の勝安房、それから二宮尊徳、と云う風に番物の偉人が並んでゐるが、上衣の鮮童達はどのやうに理解するだらう。

歴史の教科書は、皇国史観で色塗られたものが「一番重点を置いて」教えられ、修身では、朝鮮の児童には馴染むことのない、ほとんどが日本人の「番物の偉人」を列べ、そこからの教訓が押しつけられていた。「僕」が教科書の改編のなかで発見した教科書の歴史観と倫理観は、そのまま心田開発運動の本質を反映するものでもある。こういう教科書の新しい変化を前にした「僕」は、「上衣の鮮童達ほどのやうに理解するだらう」と、いささかの疑問を提示するのである。そして、作品の最後には、それをもう一度反証するかのやうに、宇垣総督の諸政策を改編した国語教科書のなかから紹介している。

卷十一になると最近の改訂だけに朝鮮の水産業、朝鮮の教育、満州と云つた風に最近の情勢が取り入れられてゐる。最後は「北鮮の旅」で豆満江のゆるやかな流や、東拓農場の緬羊の飼育の状態を書き、南緬北羊政策のために、満州から輸入された緬羊がどんなに半島の気候や風土に適して、北鮮の広大な牧野地帯で香り高い牧草でどんなにすくすくと育つてゐるか、その実益がどのやうにあるか

―と云ふ風に書いてあるのである。

作品の最後を結んでいる「と云ふ風に書いてあるのである」という叙述方法から、「朝鮮新風景」の内容は、あくまでも一つの報告に徹したものであることがわかる。また、全体から見ても、語り手自身の感想はほとんどなく、語り手が目にする事実をたんと描く叙述方法である。こういう態度と作品の唐突な結び

かたから、池田浩士は「自分が報告している内容を突きはなしている作者の姿勢が、うかがえる」と読みとっているが(28)、こうした冷やややかな視線こそ、そのまま宇垣総督の心田開発運動と農村振興運動に対する批判につながるものと言える。そして、このような態度は、一年余り後の小説「心田開発」のなかでもう一回繰り返され、さらに他の作品にもさまざまなかたちで変容していく。

4 「心田開発」とそれ以降

「心田開発」は、以前の「朝鮮新風景」を小説化したかたちで、一九三七年十月『自由』に発表された作品である。「朝鮮新風景」がおもに教育的な側面での変化をたどっているのに対し、「心田開発」はその変化の側面がより幅広く捉えられている。そして、朝鮮の新しい変化を目撃するのが、作家の分身である金太郎という設定になっている。

金太郎は朝鮮に帰郷してまもなく、大学の二年先輩で、新聞記者の飯島三太から会いたいという旨の電報を受ける。それに、金太郎もさっそく飯田三太に会いたいという衝動で、返電を打ち、京城に向かうことになる。彼に会って、帰省以来「半島の新しい変貌に、混乱し勝ちな自分の頭脳」を彼との会見を通じ整理したかったからである。金太郎は帰省してから十日余りで、朝鮮の新しい変貌に「何か得体の知れないもの」を感じて全く混乱してしまったのである。そういう新しい朝鮮の姿は、発展とはやや違うもので、そこにはさまざまな混乱と矛盾が入り乱れていたのである。郵便局には、確かに全体的にはごく小数ではあるが、女子高等普通学校出の朝鮮人局員が勤めており、道端で出征兵士を見送る私立普通学校の生徒を見ると、以前の貧民児童がみな小きれいな恰好をしていたのである。一見、朝鮮が発展しているように見えたが、しかし、その内実はやや違っていた。昇進したのも「神仏のお蔭ぢや思つて」毎朝神社に参拝をするという朝鮮人郵便配達夫は、特別手当がないから俸給が日本人の半分にしかならないと不平をこぼしながら、神社に参拝する話を「暗誦してゐるやうな口つき」で返し、普通学校は、裕福な家の子ばかり収容して、貧窮児童が排除されていることからそう見えたにすぎなかったのである。とくに普通学校は大変な入学難にも関わらず、七割の児童が教育から排除されていること、また、一学級の生徒は八十五人にも膨れ上がり、ほとんど授業ができない状態であることも友達の和尚から聞かされる。

「それはあるね、この社会で立身出世しようと思へば、学校教育に頼るより仕方がない。昔は、学校を出たものは、思想悪化して使ひ者にならなかつたが、

今ぢや日本主義教育を受けてゐる者ほど使ひいい。近頃この辺にあちこち出来てる工場は皆、普通学校卒業生と云ふ条件なんぢやからな」

普通学校に学生が集まるのは、別に暮らしがよくなったのではなく、工場に就職するためで、それは日本主義教育を強調する心田開發の一環で行われていたのである。金太郎は和尚から普通学校のこういう変化を聞いた後、軍歌を歌いながら出征兵士を見送る普通学校の児童を前にして、「この児童達が成人した頃には、どんな意味であれ、この半島も面目一新してゐるであろう」としながら、その將來の変化が「一寸想像もつかないほど深く大きいもの」と予想する。しかし、それがどのようなものであるかは明確に言わない。このようなくどいくらいの表現のなかには、新しい朝鮮の変化に対する作者の冷ややかな視線が感じられる。

一方、主人公の金太郎は京城で友人の飯田三太に会うが、彼は朝鮮のこういう新しい変化をもたらしている張本人である。「半島の統治者の赭顔の男のこと」をしきりに誉めたてる。宇垣総督のことである。友人は、総督が単身でどんな田舎にも視察に出て、南京虫が出る朝鮮人の宿に泊まり、唐辛子の白菜漬と朝鮮風の白湯を食べながら、たんねんにあちこち見て廻る不思議な人物であると紹介し、その人物によって、「荒仕事をする中小資本家以外には仲々資本を投下する者もなかつた」朝鮮に、「大資本が続々はいつて来る」ようになったと賞賛する。そして、金太郎にもその総督と会ってみることを勧める。京城での飯田三太との話が一段落し、二人は夜の京城の街に出るが、ここでも金太郎は以前とは違う朝鮮の変貌を発見する。街のさまざまな茶房や喫茶店には、高尚気な朝鮮の青年が占めており、日本人ばかりだと思っていたおでん屋も朝鮮の青年で賑わい、しかもそのおでん屋の数が夥しく増えていたのである。また、カフェーに入ってみると、客も店の女の子も「二人は若い」という日本の流行歌を歌っており、朝鮮の猥雑歌を頼んでみるが、だれも歌えない。そして、そのカフェーの女の子の話しから、京城の街の洞名がみな日本風の町名に変えられていたことも知らされる。なにか異様な方向への変化だったのである。朝鮮は確かに激しく変化していたが、その変化の内容が友人がいう方向とはどうも違うものとして金太郎の目に映ったのである。金太郎のこういう認識は、すでに飯田三太と会う前から抱いていたものであるが、それを京城の街で改めて確認することになったのである。

最初、飯田三太に会ったばかりの時、朝鮮の変貌に「驚いたか」という質問に、金太郎は「そう驚きもしないさ」とあっけなく答え、さらに「何か知らんが、懽勃してゐることだけはわかるな」と付け加えている。「新しい朝鮮」に対する冷ややかな視線である。これに対し、飯田三太は、「懽勃」とは、客観的な事態の目算が立っている希望であると解釈しているが、金太郎が目にする「新しい朝鮮」

はやたらに混乱している「鬱勃」な状態だったのである。それを金太郎は京城から故郷の街に戻ってまたもや確認する。砂金鉱山の事業のため奥地に出発する友人の伊三子を見送りながら、金太郎は彼女が携わっている砂金事業について聞かされるが、その事業というものは、

専門の技師を依頼して、大々的に発掘にかかつたりするには、砂金の露出面は少々貧弱で、不安なので、その地域に鉄条網を繞らして、入場料を取つて、付近の人々に自由採掘をさせやうと云ふのである。

というような、ほとんど今日の観光事業に近いかたちでの鉱山事業だったのである。産金産業は宇垣総督の代表政策の一つである。しかし、この政策は誇張に宣伝され、朝鮮は黄金の国で、「朝鮮の山河皆之れ金の鉱床ならざるはなく、朝鮮から金を含まぬ土を持つて来る事は困難」で、「朝鮮の地底には金がうなつて居る」とまで宣伝されたのである(19)。それでなかには、井戸を掘ったら砂金層に掘り当たり金粒をザクザク採取した話や、猟師が溪谷に落ちたとたん富鉱石の金脈露頭部を発見したという、信じられない話が多しやかに流布されたのである。これで朝鮮では猫も杓子も砂金という状態になり、本職を捨てて山野をほじくる狂気を演じたのである(20)。

昭和七年の九月頃から世を挙げての黄金狂時代を現出した。海底に沈んで居る金塊を引上げるの、山奥に埋もれて居る金を掘り出すのと、ほんの僅かな聞き込みを便りに、すぐにも大金持になれる様な、えらい騒ぎ方をしたものである。それが一年たつても其の中の一つだつて成功したと云ふ噂を聞かない。反対に彼等のインチキは続々と暴露されつつある。

作品での金太郎の友人伊三子は、このような黄金狂時代を反映するかのよう金鉱山の事業に携わり、現時点ではほとんど「インチキ」に近い商売に変わっている。同じ様な場面を「心田開発」の二ヶ月後に書かれた「草場のり子(又は、マグネサイトを探す女)」からも見る事ができるが、取りあえず、この伊三子の事業からもわかるように、産金政策はその熱狂ぶりに反し、ことごとく失敗したのである。そして、もう一つ熱狂的に推進されたのが、金太郎が父から聞き、酒幕(酒場)の女から確認することになる色衣政策である。色衣政策というのは心田開発運動の一環として進められた社会教化事業で、朝鮮総督府学務局社会課の主導で断髪と一組で強要されたものである(21)。その徹底した強要の過程で、黄海道の漢学者趙泰貞は、宇垣総督宛の陳上書と遺書を残して縊死し、同じく黄

海道海州郡の李來鎮は「白衣は祖先の美風」と称し餓死するなど、その実行においては、「余り無茶苦茶に効果を急ぐ」ことによって、とんでもない結果をもたらしたことが多かった(22)。作品での酒幕の女が白衣を染め薄い色物にしたのは、こういう時代と関係しており、その一部模様を金太郎も目撃することになる。

「これから、白いのを作るといけないんだつてね。墨汁をかける人も出るさうよ。だからこれから私、みーんな薄い色物にするの」

「それぢや淋しいだろ、白は綺麗だからな」

「仕方がないよ。そのうち又何とかなるよ」

直接的には表現されていないが、二人の会話のなかから色衣政策に対する批判を読みとることができる。金太郎自身「白は綺麗」だと思っており、彼女の気持ちに同情して「淋しいだろ」と慰めているからである。また、それに答えて彼女は「そのうち又何とかなるよ」ときわどい表現をしているのである。そして、作品は東京の兄のところに行つて女工になりたいという彼女が、「バタヤつて、どんな仕事をするの、とても儲かるんだつて」と聞くところで終わる。「朝鮮新風景」と同じく唐突な終わり方で、「心田開発」二作は、心田開発に対するこのような皮肉と冷やややかな批判が全体の雰囲気支配している。

心田開発運動に対する皮肉と批判の視線は湯浅克衛の他の作品でも見ることができる。「心田開発」と同じ単行本に収められている「移民」では、興南地域に移民としてきた松村松次郎が一生をかけてやっと開拓地を手に入れるが、それが工場の敷地になってしまう。そして、その工場というのが、新しい朝鮮の看板だった興南の日本窒素肥料株式会社になっている。松村松次郎はこの工場から出る亜硫酸ガスによって農業ができなくなり、土地を手放したことで「生きる能力を失つて死んでいく。新しい朝鮮の自慢であった興南窒素によって松村松次郎の移民が挫折するのである。この松次郎の失敗は農村振興運動の視点から見れば、大きな皮肉であろう。戦後、この興南窒素は、根拠地を新日本窒素水俣工場に移し、かの有名な水俣病を引き起こすことになるが、戦前の時期に興南窒素による公害問題を取り上げたのは、水俣病とつながることで歴史的にも大変貴重な記述であり、また時代的に見ても一つの驚きと言わざるを得ない。そして、それを作品の中に盛り込んだというのは、総督政策に対するこれ以上ない皮肉であろう。友人によって新しい朝鮮の代表格として賛嘆され、しきりに北鮮の旅を勧められるきっかけにもなっている興南窒素が、「移民」のなかでは公害を起こすものとして描かれているのである。また、一九三八年一月に発表された「根」の場合には、清津で根を下ろすことができない日本人の群像が描かれているが、北鮮開拓がし

きりに叫ばれた時代を考えると、これも冷やかな批判と言わざるを得ない。さらに、「心田開発」の二ヶ月後に書かれた「草場のり子（又はマグネサイトを探す女）」には、草場のり子が登場し、「心田開発」の伊三子同様、入場料を取って付近の住民に自由採掘させる「インチキ」まがいの鉱山事業に携わっているところがある。しかし、「草場のり子」になると、産金政策はやや色あせ、地下資源の発掘という意味でマグネサイトが新たな事業として現れる。その分だけ産金政策自体に対する作者の批判の度合いは薄くなるが、それが、前二作の主人公と重なる「葉山桃子」の的場まき子になると、産金政策への批判はほとんど見られなく、彼女自身も朝鮮の故郷を再発見し、鉱山事業に携わる人物として肯定的に評価されていくのである。今まで批判的であった心田開発が、「葉山桃子」に至り肯定的な評価に変わるのである。「葉山桃子」での的場まき子の鉱山事業は、宇垣総督の一連の政策に連動し、故郷の朝鮮を再発見する意味合いとして、以前の批判的な視線が全く抜け落ちていくからである。その点、「葉山桃子」は湯浅克衛文学において大きな転換をなす作品のように思われる。

5 むすび

以上、見てきたように、「心田開発」二作は、総督府の中心政策である心田開発を批判するかたちでなされた作品である。そして、作品には心田開発を中心とする宇垣総督のさまざまな政策が取り上げられ、それを帰郷した作者の分身が冷静に観察する姿勢で貫かれている。そして、その主人公の視線によって、友人からしきりに賛嘆され、主人公の帰郷を決心させるきっかけにもなっている「新しい朝鮮」の実態が冷やかに捉えられている。「朝鮮新風景」では教育の側面がおもに取り上げられ、普通学校の混雑、学校から排除された貧しい農村の子供と改編された教科書の紹介などによって、心田開発の本質が明確に提示されている。このような批判的な態度は、「心田開発」になると、よりさまざまなかたちで拡大し、産金政策、色衣運動、普通学校の教育政策、さらに変化した朝鮮の風俗にまで冷やかな視線が投げかけられている。さらに、「心田開発」二作で行われたこのような批判的な視線は、それ以降の作品にも続き、「移民」「根」「草場のり子」のなかからもその片鱗を見ることができるとは、こういふ批判の姿勢は、「葉山桃子」に至ると全くなくなり、宇垣総督の諸政策に同調していくことになる。今までの心田開発に対する批判的な態度が肯定的に変わり、この時点での湯浅克衛文学の大きな転換を推測させる。

従来の湯浅克衛文学は、氏が大陸開拓文芸委員、皇道朝鮮研究委員会常任委員を歴任し、植民地朝鮮に深く関わったことで、その文学は国策文学として無視さ

れ、その研究も避けられてきたのが現状である。しかし、以上の「心田開発」の考察から見ると、必ずしもそうではない。そこには、当時としてはきわめて珍しい総督府政策に対するしたたかな批判があり、また、それを朝鮮の側から見る視線も持ち合わせていたのである。国策の一面というのは、愛情や興味と裏腹のものである。それを一概に非難していくのはあまり生産的なことではないような気もするが、しかし、それはともかく、「心田開発」二作は、今まで国策迎合の面ばかり強調された氏の文学における新たな一側面として、ただの政治観念では済まされない複雑、かつ矛盾する時代層と作家の内面風景を現しているかのようには思われる。最後に、湯浅文学が持つ朝鮮に対する冷静で緻密な観察は、文学を越え植民地文化史においてもきわめて貴重な資料であることを指摘しておく。

注

(1) 池田浩士は『カンナニ』（湯浅克衛植民地小説集、インパクト出版会、一九九五年）「解説」で、「人物たちのこのような反復登場は、湯浅克衛の描く世界の本質的な狭さと、かれの作品が基本的には個人的体験にもとづいているという事実とを、示している」と指摘している。

(2) 「心田開発」「心田開発―朝鮮新風景」の先行論としては、お互いに対立するものが二つある。在日評論家任展慧眼は、「植民地二世の文学―湯浅克衛への疑問」（『季刊三千里』、一九七六年春）のなかで、「心田開発」の友人の新聞記者が宇垣総督を礼賛したところを取り上げ、「朝鮮総督への親近感と一体感とは、湯浅克衛のなかに「半島の統治者」としての日本人意識」を呼びおこし、国策文学に転じる作者の「権力側の朝鮮認識」とも関わっているものと指摘している。これに反し、池田浩士は前出(1)で、この二作の叙述の問題を取り上げ、この二作が「聚」以後、「無自覚と批判が共存する湯浅克衛の文学的「抵抗」」が「一度だけ試みられた」作品として考察している。本稿は池田浩士の指摘に添うかたちで、それを実際の心田開発運動の状況のなかで、また他の作品との関連の上で総体的に考察した。

(3) その式場での総督の指示の一部模様は総督府に機関誌『朝鮮』（一九三五年四月）に紹介されている。本文の引用はこれによる。

(4) 朝鮮（朝鮮総督府、一九三五年五月号）

(5) 鎌田澤一郎『宇垣一成』（中央公論社、一九三七年）によると、宇垣家は、「家代々日蓮宗」であって、祖父母が宇垣一成を訓育する際、「日蓮上人の話、大塩平八郎が窮民を救ふ為に心をくだいた話など」をよくし、それが

「子供心にも深い印象を与へた」という。また後年総督が「大塩平八郎の詠んだ農村問題の詩のいくつかを暗誦」したのは、この幼年時代の訓育が影響したという。後の農村振興運動もこのような思想的な背景から出発したと言われている。

- (6) 『朝鮮』（朝鮮総督府、一九三六年二月）
- (7) 『朝鮮』の一九三六年三月号は「心田開発の特輯号」として組まれたもので、そこには心田開発を論ずる各様各色の論文が載せられている。
- (8) 梁村奇智城『心田開発』（朝鮮研究社、一九三七年）を参照。
- (9) 梁礼先「湯浅克衛年譜」（注（1）の『カンナニ』に所収）
- (10) 山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』（岩波新書、一九七一年）。なお、本文中の記述の一部はこの本を参考にした。
- (11) 『朝鮮総督府施政年報』（朝鮮総督府、一九三五年）
- (12) 『朝鮮総督府施政年報』（朝鮮総督府、一九三三年）
- (13) 注（12）に同じ。農村漁村振興運動の計画目標を紹介すると、
 - (イ) 各農家ノ不足食糧ノ充実ヲ期シ春窮ヲナカラシムルコト
 - (ロ) 現金収支ノ均衡ヲ保持セシムルコト
 - (ハ) 負債ヲ整理償還シテ其ノ重圧ヨリ救出スルコト
- (14) 『朝鮮総督府施政年報』（朝鮮総督府、一九三七年）
- (15) 『伸び行く朝鮮（宇垣総督演説集）』（朝鮮総督府、一九三五年）には、「勤勞教育と精神教育」の目次があり、本文での引用部分が確認できる。
- (16) 『朝鮮年鑑』（朝鮮総督府、一九三五年）
- (17) 注（16）に同じ。
- (18) 注（1）の「解説」。
- (19) 三浦悦郎『生氣躍動する産業朝鮮』（日本評論社、一九三四年）。同様の模様が鎌田澤一郎『朝鮮は起ち上る』（千倉書房、一九三三年）にも見られる。
- (20) 注（19）の三浦悦郎の著書。
- (21) その実施の具体的な理由については『色服と断髪』（社会教化資料第二輯、朝鮮総督府学務局社会課、一九三三年）に詳しい。
- (22) 井上収『宇垣一成論』（日刊大陸、一九三五年）